食生活論		担当教員	三浦　努（みうら つとむ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

TV・新聞・インターネットなどには正しい情報ばかりではなく、間違った情報や信憑性のない情報があふれ、玉石混交の状態である。栄養を学習するに当たり、正しい栄養情報を選択する知識が不可欠である。

わが国および諸外国の栄養政策、食文化の歴史や地域の特色、健康食品や栄養補助食品、一般大衆における食行動など、多方面から栄養問題をとらえることにより、今後学習する専門科目の関連性や重要性を理解することを目的とする。

[2] 授業の計画

第 1 回　ガイダンス（授業内容の概要について説明）
第 2 回　食生活の概念
第 3 回　食生活習慣の調査
第 4 回　日本の健康問題について
第 5 回　日本の栄養・食生活問題について
第 6 回　食生活と疾病（生活習慣病とは）
第 7 回　メタボリックシンドロームとは
第 8 回　日本の栄養政策
第 9 回　日本と世界の食糧事情
第 10 回　食文化（歴史）
第 11 回　食文化（地域）
第 12 回　健康とは
第 13 回　健康食品・栄養補助食品について
第 14 回　間違った食生活とは
第 15 回　望ましい食生活とは

[3] 評価の方法

提出物（40 点）未提出の場合は減点する。課題レポート（60 点）。
欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

プリント配布

[5] 参考図書

特になし

生活経営学		担当教員	高田洋子（たかだ ようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

私たちは、現在、自分以外の人が作ったモノ、あるいは人が提供してくれるサービスを消費することなくして生活することはできない。よりよい消費は生活の質を確保する１つの手段である。しかしながら、消費に関する問題は後をたたない。現代の消費の問題を把握するとともに、具体的な消費の問題を考えることを通じて、消費のトラブルの未然防止の力をつけていくことを目的とする。

[2] 授業の計画

第　1回　登録
第　2回　消費者とは何か、消費者問題とは何か、近年の消費者問題
第　3回　契約って何？、契約書を読んでみよう、書いてみよう
第　4回　特殊販売と問題商法、悪徳商法のいろいろⅠ
第　5回　悪徳商法のいろいろⅡ、クーリングオフを学ぶ
第　6回　日本の契約における課題、消費者契約法
第　7回　契約の解約をしてみよう（クーリングオフ、消費者契約法）
第　8回　欠陥商品とは
第　9回　ＰＬ法
第10回　住宅の欠陥
第11回　消費者行政
第12回　消費者信用１（販売信用）
第13回　消費者信用２（消費者金融）
第14回　クレジットカードと金銭管理
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

ミニテスト（授業中に行う）、レポートおよび毎回の提出物によって評価する。

[4] 教　　材

大藪千穂「お金と暮らしの生活術」（昭和堂，2006年）

[5] 参考図書

授業の中で紹介する。

保育学		担当教員	海道　洋子（かいどう　ようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

この保育学は家庭科の教員や保育士といった専門家養成のための講義ではなく、ごく一般の学生を対象にして、子どもが育つこと、子どもを育てることに思いをはせ、自分自身が育ってきた過程や子ども時代を振り返り、人が人として育つことの意義や子どもの成長の奥深さを感知し、当然もっていて欲しい常識のレベルでの「教養としての保育学」にしたい。

少子高齢社会といわれる現代では、昔のように子どもの育っていく姿を家庭の中で見る事はほとんど不可能である。弟妹・甥姪の世話を手伝いながら、自然に子育てを学ぶ機会はまずなくなったと言って良いだろう。したがって次代を担う子ども達の保育（乳幼児がより良い方向に育てられるように援助すること）を授業の中で学ぶ事は意義のあることと思う。

学生が自分の問題として、保育（子育て）に興味が持てるように進めていく。内容としては発達特徴と子どもの気持ちに寄り添った具体的なかかわりを学んでいく。子どもの遊びや年齢に適した絵本を紹介したり、教科書や VTR を用いたりして授業を展開する。楽しく、しかし真剣に学んでもらいたい。

[2] 授業の計画

第 1 回　保育学とは何か（オリエンテーションを兼ねて）
第 2 回　保育の歴史と現状
第 3 回　子どもの心身の発達と遊び　①（出生～6 か月）
第 4 回　　〃　　②（6 か月～1 歳 3 カ月）
第 5 回　　〃　　③（1 歳 3 カ月～2 歳）
第 6 回　　〃　　④（2 歳）
第 7 回　　〃　　⑤（3 歳）
第 8 回　　〃　　⑥（4 歳）
第 9 回　　〃　　⑦（5 歳）
第 10 回　　〃　　⑧（6 歳）
第 11 回　家庭、小学校、地域社会との連携
第 12 回　少子高齢社会における子育て①（子育て支援制度）
第 13 回　　〃　　②（子育て支援の実情）
第 14 回　子どもを取り巻く環境を考える①（児童虐待）
第 15 回　　〃　　②（児童虐待の実情）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験　　100 点
欠席、遅刻・早退については減点する。
その他　　授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）についても減点する。

[4] 教　　材

改訂・保育士養成講座編纂委員会/編　『保育原理』（全国社会福祉協議会 2010・4 月）

色彩学Ⅱ		担当教員	三輪　優（みわ　すぐる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

一年次での「色彩学」に続き、色の基礎を学び、それを基に環境色彩・デザインを考える。我々が心豊かに調和のある生活ができることを目的に、身の回わりの道具から室内空間・景観へとその色彩計画について学ぶ。

[2] 授業の計画

第 1 回　光と色
第 2 回　色彩体系（マンセル・オストワルドシステム）
第 3 回　色彩調和論
第 4 回　配色
第 5 回　第 4 回に同じ
第 6 回　インテリアの色彩(1)
第 7 回　第 6 回に同じ
第 8 回　インテリアの色彩(2)
第 9 回　第 8 回に同じ
第 10 回　インテリアの色彩(3)
第 11 回　第 10 回に同じ
第 12 回　景観の色彩(1)
第 13 回　第 12 回に同じ
第 14 回　景観の色彩(2)
第 15 回　第 14 回に同じ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
試験の結果や授業中のレポートで 80 点、授業への取組み 20 点の割合で評価する。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教　　材

色彩能力検定対策参考書、新配色カード 1996

生活情報処理		担当教員	三輪（みわ） 優（すぐる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

情報のデジタル化によって、伝達の手法が変化してきました。授業では、ものづくりの現場での伝達手法の変化を把握し体験することで、アナログとデジタル双方の利点をよく理解し、今後の変化に柔軟に対応することを目的とします。

[2] 授業の計画

第 1回　三次元の世界（ＣＡＤ、ＣＡＭ、ＣＧ）
第 2回　ＣＧモデリング　　１．基本操作
第 3回　　〃　　２．自由曲線と線図
第 4回　　〃　　３．自由曲面の作成
第 5回　ＣＧレンダリング　１．光源の設定
第 6回　　〃　　２．表面材質の設定
第 7回　応用課題
第 8回　　〃
第 09回　　〃
第 10回　　〃
第 11回　　〃
第 12回　　〃
第 13回　プレゼンテーション
第 14回　　〃
第 15回　まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題の内容 70%、授業への取組み 30%の割合で評価する。
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教　　材

Shade、デジタルコンテンツ

グラフィックデザインⅡ		担当教員	西畑敏秀（にしばたとしひで）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

ビジュアル・コミュニケーションのためのグラフィックデザインについて「ポスター」や「広告」などの広報ツールや「マーク・ロゴタイプ」や「ピクトグラム」などの課題をとおして発想・表現要素・表現技術を学ぶ。

[2] 授業の計画

第 1回　はじめに　オリエンテーション　グラフィックデザインの役割
第 2回　演習課題マーク・ロゴタイプ／講義・スケッチ制作（1）
第 3回　演習課題マーク・ロゴタイプ／mac 制作（2）
第 4回　演習課題マーク・ロゴタイプ／提出・講評（3）
第 5回　演習課題ピクトグラム／講義・スケッチ制作（1）
第 6回　演習課題ピクトグラム／mac 制作（2）
第 7回　演習課題ピクトグラム／提出・講評（3）
第 8回　講義／アートディレクションとコピー
第 9回　表現企画／写真とイラストレーション、文字
第10回　演習課題ポスター／講義・スケッチ制作（1）
第11回　演習課題ポスター／mac 制作（2）
第12回　演習課題ポスター／提出・講評（3）デザインコンクール出品
第13回　演習課題グラフィックパターン／講義・スケッチ制作（1）
第14回　演習課題グラフィックパターン／mac 制作（2）
第15回　演習課題グラフィックパターン／提出・講評（3）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心となるため、提出する課題作品で評価する（前期 50 点　後期 50 点）
また、欠席、遅刻、早退を減点の対象とする。

[4] 教　　材

ノート、記憶媒体など、画材は各自で準備

[5] 参考図書

随時参考図書を紹介

グラフィックデザインⅢ		担当教員	西畑敏秀（にしばたとしひで）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

ブランディングは企業のみならず、商品、地域社会、ショップ、各種サービス、学校、個人、イベントに至るまでさまざまな規模で展開されている。ブランディングにおける CI、VI の仕組みや関係を開発事例から学び、具体的に自分自身の課題として取り組むことで手段や展開方法を理解・習得する。Web 演習、演習Ⅱと連動した授業となる。

[2] 授業の計画

第 1 回　はじめに　オリエンテーション
第 2 回　開発事例検証ー宿題
第 3 回　企画案チェックなど
第 4 回　演習・制作（1）基本デザインシステム
第 5 回　演習・制作（2）基本デザインシステム
第 6 回　演習・制作（3）基本デザインシステム
第 7 回　演習・制作（4）基本デザインシステム
第 8 回　中間プレゼンテーション・チェック
第 9 回　演習・制作（1）応用デザインシステム
第 10 回　演習・制作（2）応用デザインシステム
第 11 回　演習・制作（3）応用デザインシステム
第 12 回　演習・制作（4）応用デザインシステム
第 13 回　演習・制作（1）広告デザイン
第 14 回　演習・制作（2）広告デザイン
第 15 回　プレゼンテーション・まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心となるため、提出する課題作品で評価する（前期 50 点　後期 50 点）
また、欠席、遅刻・早退を減点の対象とする。

[4] 教　　材

スケッチブック、ノート、記憶媒体など
制作に必要な画材は各自で準備

[5] 参考図書

随時参考図書などを紹介

消費環境論		担当教員	西畑敏秀（にしばたとしひで）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

あらゆるデザインの現場で基本的な構成要素となる、文字、レイアウト等、情報伝達のコツ・ポイントを学ぶ。和文、欧文、文字組み（縦・横）、大小、文字間、行間等具体的な構成を日常使用するコンピュータソフトを自在に操作できる技術とノウハウを身につける。
また次のステップでは写真の大小と文字組、配置構成、余白の効果的構成等、レイアウトの基本と実践をマスターし、プレゼンテーションパネル作成や企画書を作成する場合などのテクニックを磨く。

[2] 授業の計画

第 1回　はじめに　オリエンテーション
第 2回　文字とデザイン
第 3回　文字／欧文書体ー歴史、カテゴリー
第 4回　文字／和文書体ーかな、明朝体、ゴシック体
第 5回　中間演習課題／A4 文字組み
第 6回　中間演習課題／講評
第 7回　文字組み／様式、文字間、行間
第 8回　レイアウト基本／図版率
第 9回　レイアウト基本／版面率、余白
第10回　レイアウト基本／ジャンプ率ー画像、文字、トリミング
第11回　レイアウト基本／グリッド拘束率
第12回　レイアウト基本／構成要素、リズム、対比、アクセント、比率、バランス
第13回　演習課題／名刺
第14回　講評ー演習課題／雑誌広告
第15回　講評ー演習課題／商品イメージパンフレット

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技が中心となるため、提出する課題作品で評価する（前期 50 点　後期 50 点）
また、欠席、遅刻・早退を減点の対象とする。

[4] 教　　材

ノート、記憶媒体など、画材は各自で準備。

[5] 参考図書

随時参考図書を紹介。

Ｗｅｂデザイン Ｉ		担当教員	賀川泰成（かがわ やすなり）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

IT 社会が進んだ現在、Web サイトはひとつのメディアとなり、企業やショップなどの情報発信・販売には欠かせないものになっている。その Web サイト制作の基礎からデザイン、リリースまで、解説や演習を交えて学習する。後期の Web デザイン II と連動した授業となる。

[2] 授業の計画

第 1 回　オリエンテーション
第 2 回　インターネットの概要と Web サイト制作の流れ
第 3 回　web サイト制作の基礎(1)
web サイト制作に必要な Photoshop、Illustrator、Dreamweaver（web サイト作成ソフト）を、テキストや例題を制作することにより修得（第 7 回迄）
第 4 回　web サイト制作の基礎(2)
第 5 回　web サイト制作の基礎(3)
第 6 回　web サイト制作の基礎(4)
第 7 回　web サイト制作の基礎(5)
第 8 回　web サイト制作の演習(1) 例題制作
第 9 回　web サイト制作の演習(2)
第 10 回　Web サイト制作(課題制作)
第 11 回　〃
第 12 回　〃
第 13 回　〃
第 14 回　〃
第 15 回　課題提出・総論

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題作品 100%。ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

『Dreamweaver　レッスンブック』　（ソシム株式会社）

[5] 参考図書

ＷｅｂデザインⅡ		担当教員	賀川泰成（かがわやすなり）・吉村正照（よしむらまさてる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

IT 社会が進み、消費者の購買行動が変化した現在、Web サイトはただ情報発信するためだけのものではなくなっている。その中で企業ブランディングや営業活動・販売における Web サイトの重要性は高い。本演習では、Web における効果的なデザイン手法と、現在 Web 制作の標準である CSS について解説や演習を交えて学習する。

前期の Web デザインⅠとの連動となり、Web デザインⅠを受講していることが望ましい。

[2] 授業の計画

［賀川分］

第 1 回　オリエンテーション・Web におけるグラフィックデザイン(1)
第 2 回　Web におけるグラフィックデザイン(2)
第 3 回　Web におけるグラフィックデザイン(3)
第 4 回　Web におけるグラフィックデザイン(4)

［吉村分］

第 5 回　HTML/CSS とは
第 6 回　CSS によるレイアウト、余白の取り方
第 7 回　CSS による配色、テキストの装飾
第 8 回　背景画像を用いた装飾
第 9 回　CSS3 による表現
第 10 回　jQuery による表現
第 11 回　Web サイト制作(課題制作)
第 12 回　〃
第 13 回　〃
第 14 回　〃
第 15 回　課題提出・総論

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

課題作品 100%。ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

『詳解 HTML&XHTML&CSS 辞典』大藤 幹（秀和システム）

[5] 参考図書

『Web レイアウトの「解法」』矢野りん（エムディエヌコーポレーション）
『Pocket 詳解 HTML5&CSS3 辞典』大藤 幹（秀和システム）

プロダクトデザインⅠ		担当教員	藤（ふじ）　秀（しゅう）　悟（ご）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

プロダクトデザインⅠは、日常生活の中の「もの」の機能性と美と生活との関連について考える。具体的なテーマとしては、ラッピング、パッケージをとりあげ、さまざまな問題点などを通して「人とものと環境」について考える。

[2] 授業の計画

第 1 回　ラッピング「祝儀袋」デザインについての説明。
第 2 回　アイデアスケッチ、試作。
第 3 回　紅白の紙を使用して制作。
第 4 回　パッケージデザインについての説明。
第 5 回　市販品のパッケージについて検討評価。
第 6 回　各自のテーマについて検討。
第 7 回　各自のテーマ、コンセプトに基づいてアイデアスケッチを展開。
第 8 回　アイデアスケッチの中より数点について試作１。
第 9 回　アイデアスケッチの中より数点について試作２。
第 10 回　プレゼンテーションモデル制作１（できるだけ原寸、原材料でつくる）。
第 11 回　プレゼンテーションモデル制作２（できるだけ原寸、原材料でつくる）。
第 12 回　プレゼンテーション用パネル制作（Ｂ２）。パネルの内容は、タイトル、コンセプト、展開図、写真２～３点。
第 13 回　プレゼンテーション用パネル制作（Ｂ２）２。パネルの内容は、タイトル、コンセプト、展開図、写真２～３点。
第 14 回　プレゼンテーション用パネル制作（Ｂ２）３。パネルの内容は、タイトル、コンセプト、展開図、写真２～３点。
第 15 回　合評会

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題作品を評価する。ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

各自、自分のテーマに応じた材料を使用して制作する。

[5] 参考図書

朝倉直巳『紙による構成・デザイン』(美術出版社 1982)

プロダクトデザインⅡ		担当教員	藤（ふじ）　秀悟（しゅうご）・三輪（みわ）　優（すぐる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次後期	選択

【藤 担当分】

[1] 授業のねらい

立体構成のデザイン学習として板ガラスを素材に選び空間構成をする。日常的な素材でありながら加工する機会のなかった素材と取り組むことによってガラスに対して新たな認識を深めることもねらいとしている。

[2] 授業の計画

第 1 回　基本説明と参考作品鑑賞
第 2 回　カッティング練習（1）
第 3 回　カッティング練習（2）
第 4 回　ハンダワーク練習（1）
第 5 回　ハンダワーク練習（2）
第 6 回　アイデアスケッチ
第 7 回　ガラスカッティング（1）
第 8 回　ガラスカッティング（2）
第 9 回　ガラスカッティング（3）
第 10 回　構成（1）
第 11 回　構成（2）
第 12 回　構成（3）
第 13 回　構成（4）
第 14 回　仕上げ
第 15 回　合評

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題作品（100%）、ただし欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為については減点して評価する。

[4] 教　　材

透明板ガラス、ステンドグラス、ミラー、コパーテープ、ハンダ、ハンダゴテ等

[5] 参考図書

朝倉直巳『紙による構成・デザイン』(美術出版社 1982)
『すてんどぐらすあーと（Vol.1～10)』(アート社)

【三輪 担当分】

[1] 授業のねらい

人が使うものを、年齢や国籍や能力に関わりなく、より多くの人々がより使いやすく使ってみたいと感じられるように考える。このユニバーサルな視点にたって、既存の身の回りのものを自分なりに見つめなおし計画に沿って実践し、プロダクトデザインに必要な考える姿勢やスキルを身につける。

[2] 授業の計画

第 1 回　アイデアを展開する（スケッチ）
第 2 回　〃
第 3 回　〃
第 4 回　〃
第 5 回　確認モデルを作成する
第 6 回　〃
第 7 回　〃
第 8 回　〃
第 9 回　〃
第 10 回　プレゼンテーションパネルを作成する
第 11 回　〃
第 12 回　〃
第 13 回　〃
第 14 回　〃
第 15 回　合評

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題の内容　100%
授業に出席して制作することに意義があるので欠席、遅刻、早退を減点して評価する。

[4] 教　　材

A3 ファイル、A3 コピー用紙、モデル材料（第 1 回に指示）

クラフトデザインⅠ		担当教員	松井（まつい） 勝彦（かつひこ）・古木（ふるき） 晶子（あきこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次前期	選択

【松井　担当分】

[1] 授業のねらい

陶芸は日本文化に広くかつ深く根づいており、茶道・華道等にとどまらず、日本料理においてその食器の多彩さは世界に類をみないものである。陶器の制作を通じて日本的美意識をより深く理解することを目的とする。

[2] 授業の計画

第 1 回　陶芸の概要
　　たたら技法によるコップの成形
第 2 回　たたらの応用
第 3 回　茶碗の成形
第 4 回　お皿の成形
第 5 回　マグカップの成形
第 6 回　絵付け・釉掛け
第 7 回　焼成　越前焼の歴史・釉掛け
第 8 回　プレゼン（ガラスと合同）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
松井：制作姿勢 50%、作品 50%で評価する。
ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

成形道具

[5] 参考図書

つくる陶磁郎（28 号）（双葉社）

【古木　担当分】

[1] 授業のねらい

ガラス工芸の日本での歴史に造詣を深め、いくつかの基本的技術を学習し、〝オリジナルのとんぼ玉〟、それを用い〝誰かに贈る・身につけるアクセサリー〟の制作を行う。
それらを通し、一定の制約の中で自分自身のイメージを形として表現し、他者につたえる表現力の向上を目標とする。また道具を使って、組む＋直す為の基本的技術を身につける。

[2] 授業の計画

第 1回　とんぼ玉の歴史、安全の為のレクチャー。課題説明。
第 2回　基本的技術：①玉にする　②線の模様をつける。
第 3回　基本的技術：③点打ち・ひっかきもよう　④マーブル玉をつくる。
第 4回　自由制作、アクセサリー作り
第 5回　応用的技術：パーツを使う
第 6回　自由制作
第 7回　アクセサリー作り
第 8回　講評

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
古木：受講授業への積極的参加で 60%、作品 40%で評価する。
ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

制作道具各種。テキスト『初めてのとんぼ玉』。
アクセサリー仕立て用のヤットコなど。

[5] 参考図書

古木晶子著：『はじめてのとんぼ玉』(2010)

[6] その他

準備物：タオル、サングラス（無い人はメガネなど目を保護するもの)、
スニーカーなどの足先が出ない底のしっかりした靴、綿製のＴシャツ、エプロン

クラフトデザインⅡ		担当教員	瀬沼（せぬま）　健太郎（けんたろう）・増田（ますだ）　頼保（よりほ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

【瀬沼　担当分】

[1] 授業のねらい

創作の森ガラス工房のスタッフと共にものづくりを行なっていく。自分のアイディアを実現するためにプロフェッショナルとどのようなコミュニケーションを取ればいいのかを模索し、発想から完成、そして検証までの一連の流れを実践的に体験していく。

[2] 授業の計画

第 1 回　ガラスの歴史・技術（スライドレクチャー）、課題説明
第 2 回　デザインプレゼン
第 3～8 回
　集中講義　吹きガラス
　グラス・ボウル・花器などの制作
　金津創作の森にて 2 日間
　課題最終日講評会

[3] 評価の方法

受講姿勢 50%、作品 50%で評価する。
ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

各種スライド他

[5] 参考図書

[6] その他

集中講義の際必要な準備物：サングラス、タオル、スニーカー、綿製の作業服（T シャツ・長ズボン、軍手スケッチブック、筆記用具

【増田　担当分】

[1] 授業のねらい

クラフトがインテリアとして利用される素材には、繊維や和紙、陶土など福井地域産業由来のものがあり、それらの素材の性質、特質、活用法やクラフト作品に結び付く芸術的な思考や技術について学ぶ。また、生活の中にどのように生かされるかを学外授業を通して体得する。

素材の本質を知り、自分のものにした上で、環境という視点からリサイクル・リユース・リデュースなどにも配慮しながら一つの作品に仕上げ、それを展示し、実際に販売することを想定した実習や技術を習得する。

[2] 授業の計画

第 1 回　午前　オリエンテーション和紙とクラフトについて、和紙の里見学
第 2 回　午後　施設利用説明と理論実習（ﾚﾎﾟｰﾄ提出１：A4 サイズ表紙＋ﾚﾎﾟｰﾄ 3 枚以上）
第 3 回　午前　和紙の可能性について実習指導
第 4 回　午後　和紙紙漉き実習（作品化計画書提出）
第 5 回　午前　クラフトデザイン作品化指導
第 6 回　午後　クラフト作品化実習（ﾚﾎﾟｰﾄ提出２：A4 サイズ表紙＋ﾚﾎﾟｰﾄ 3 枚以上）
第 7 回　午前　クラフト作品化実習完成
第 8 回　発表会プレゼンテーション…自作品前で発表する。（作品写真とプレゼン資料提出）

[3] 評価の方法

実習における授業態度（20%）、小レポートまたはデッサン（20%）、企画書作成（20%）、クラフト作品のプレゼンテーション（40%）から、発表の態度や作品などを評価する。

[4] 教　　材

テキストは使用しません。講義レジュメや関連資料を配布して授業を行う。

毎回 F6 か F8 の大きさのスケッチブックと色鉛筆セット、水彩絵の具セット、筆などを必ず持参すること。

[5] 参考図書

松岡正剛著『花鳥風月の科学』（淡行社）を参考にいたします。

[6] その他

学外に出かけて実際の生産現場も参考にしたい。訪問や実習では汚れるかもしれないので、ジャージなど動き易く少々汚れても良い服装が望ましい。

ファッションデザインⅡ		担当教員	前田博子（まえだ ひろこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

衣服がつくられる工程を実技を通して学ぶとともに、フィールドワークを通してファッション市場の流れを把握し、消費者に求められるものが何であるのかを考察する。これらによってつくることと消費することの関係を設定し、自身が着用できる商品を制作し、自己表現の自立を企て、社会生活に通ずる知識を習得する。

ファッションコンテストへ出品することを達成目標とする。

[2] 授業の計画

第 1回　オリエンテーション
第 2回　市場調査
第 3回　デザイン画［ワンピース］
第 4回　パターンメイキング　トワル作成
第 5回　パターンメイキング　パターン作成
第 6回　縫製(1)
第 7回　縫製(2)
第 8回　デザイン画［ドレス］
第 9回　パターンメイキング　サンプル作成
第10回　パターンメイキング　トワル作成
第11回　パターンメイキング　パターン作成
第12回　縫製(1)
第13回　縫製（2）
第14回　縫製（3）
第15回　まとめ　合評と評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
提出課題80%、授業態度20%の割合で評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

必要に応じて配布する。

生活造形Ⅲ		担当教員	前田博子（まえだ ひろこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

今までに習得した技法を応用し、新たな素材研究を行う。

生活の中で使えるものをつくる。各々の技術を学ぶ中で、ものの成り立ちを理解し、表現の幅を広げ深みのあるものづくりを目指す。

また、今まで習得した技法を応用しオリジナル作品を制作することを達成目標とする。

[2] 授業の計画

第 1回　素材演習（1）
第 2回　　〃　（2）
第 3回　　（3）
第 4回　テキスタイル制作：ミシンワーク（1）
第 5回　　〃　　：ミシンワーク（2）
第 6回　　〃　　：ミシンワーク（3）
第 7回　　〃　　：ミシンワーク（4）
第 8回　　〃　　：編み(1)
第 9回　　〃　　：〃（2）
第10回　　〃　　：〃（3）
第11回　　〃　　：フェルトメイキング(1)
第12回　　〃　　：　〃　(2)
第13回　　〃　　：　〃　(3)
第14回　　〃　　：　〃　(4)
第15回　まとめ　合評と評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

提出課題80%、授業態度20%の割合で評価する。

欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

随時参考図書などを紹介。

環境デザイン演習		担当教員	内山秀樹（うちやまひでき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

インテリア、すまい、サイン、パブリックアート、まちづくり企画など環境デザイン分野の中から、受講者の興味関心に応じて３つのテーマを設定し、調査、企画、デザインを行う。

この演習の学習目標は以下の通りである。

①テーマに関して調べる力を高める。

②テーマに関して企画・構想する力を高める。

③テーマを具体的な形にする力をつける。

環境デザインを卒業研究のテーマとするものにとって、この授業は必須である。

[2] 授業の計画

第 1回　ガイダンス（共通テーマ１、２の決定）
第 2回　テーマ１の検討、調査、事例研究
第 3回　企画、ラフスケッチ
第 4回　制作
第 5回　仕上げ、合評
第 6回　テーマ２の検討、調査、事例研究
第 7回　企画、ラフスケッチ
第 8回　制作
第 9回　仕上げ、合評
第10回　テーマ３の検討（個別テーマ）
第11回　企画、ラフスケッチ
第12回　制作
第13回　制作
第14回　仕上げ、合評
第15回　講義のまとめ、総評

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。

課題約80%、取り組み姿勢（ふりかえりシート）20%のウェイトで評価。

欠席、遅刻、早退は減点する。

[4] 教材

必要に応じて資料を配布する。

[5] 参考図書

進士五十八他『風景デザイン　感性ボランティアのまちづくり』(学芸出版社 1999)
藤岡作太郎『花と緑のまちづくり』(学芸出版社 2005)
服部圭郎『人間都市クリチバ』(学芸出版社 2004)
『コミュニティガーデンのすすめ』((財)都市緑化基金)
『図解ガーデニングのコツ』(小学館 2003)

[6] その他

途中で環境デザインに関して有意義なテーマが発生した場合は、テーマをそれに変更する場合もある。

インテリアプランニング		担当教員	原田 ゑつ子（はらだ えつこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

将来インテリアコーディネーターを希望している学生を対象に、まず足がかりとしてリビングスタイリスト資格試験（7 月）を受験する。合格を目標にテキストを教材に講義し、併せてインテリアコーディネーター資格取得の為の情報も発信する。

リビングスタイリストの合格を自信に　社会人としてスタートしてほしい。

インテリアコーディネーター、リビングスタイリストはお客様とのコミュニケーション能力が問われる。この講義をとおして社会人として大切なコミュニケーション能力を養ってもらいたい。

[2] 授業の計画

第 1回　オリエンテーション⇔インテリアコーディネーター、リビングスタイリストとは
第 2回　販売知識→インテリアコーディネーター、リビングスタイリストの仕事
第 3回　販売知識→流通
第 4回　情報
第 5回　接客販売
第 6回　ビジネスマナー
第 7回　家具
第 8回　窓装飾（ウインドゥトリートメント）
第 9回　窓装飾（ウインドゥトリートメント）
第 10回　照明
第 11回　設備→キッチン、バス、トイレ、洗面
第 12回　住宅設備ショールーム、家具店見学→インテリアコーディネーターの現場を体感
第 13回　住生活アクセサリー→グリーン、アート、テーブルウェアー
第 14回　リビングスタイリスト資格試験事前　過去問題によるリハーサル
第 15回　展示場（インテリア）見学

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

レポート 20%、リビングスタイリスト資格試験事前過去問題によるリハーサル 30%、リビングスタイリスト資格試験 50%で評価する。

授業に対する姿勢（欠席、遅刻、授業進行の妨げになる行為）は減点の対象となる。

[4] 教　　材

リビングスタイリスト資格試験公式テキスト　発行所・(株）ハウジングエージェンシー出版局

[5] 参考図書

インテリアコーディネーターハンドブック　販売編　発行所・社団法人インテリア産業協会

インテリア設計		担当教員	松村（まつむら）　孝子（たかこ）・明星（あけぼし）　雅紀（まさのり）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

インテリア設計を、CAD を使って行います。現在、技術として CAD の操作は必要不可欠なもので、基本の平面図、展開図は CAD で作成します。

「イメージを形にする」は、自分のインテリアプランを色彩計画、エレメントの選択からパースをグリッドで描き、水彩で着彩を目標にプレゼンテーションボードを造る技術を身につけていきます。

[2] 授業の計画

第 1 回　オリエンテーション　プランニングの基本（松村担当）
第 2 回～第 4 回　CAD 操作（明星担当）
第 5 回～第 6 回　CAD で平面図を書く（明星担当）
第 7 回　CAD で展開図を書く（明星担当）
第 8 回　L.D.K のプランニング、色彩計画（松村担当）
第 9 回　エレメントの選択、パースを描く（松村担当）
第 10 回～第 11 回　パースを描く（松村担当）
第 12 回～第 13 回　パースの着彩（松村担当）
第 14 回～第 15 回　プレゼンテーションボードの作成（松村担当）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
実技中心の為、課題提出で評価する。
ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

宮後浩『初めての建築パース』(学芸出版)
資料などのプリント配布
準備物用具　三角スケール、三角定規、その他製図用具一式、水彩絵の具一式

[5] 参考図書

ハンドブック技術編『インテリアコーディネーター』(インテリア産業協会)

生活材料学		担当教員	八木（やぎ）　茂（しげる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

本講は、室内環境を構成する内装仕上げ材料の種類・特性・用法を、素材に触れながらわかりやすく提示するよう努める。快適な室内環境の形成の為には、どんな材料がどの部分にどう生かされているのだろうか。具体的な生活環境を考える上で必要な、材料に対する知識と理解を深めるよう希望する。

[2] 授業の計画

第 1 回　概論（インテリア材料について）
第 2 回　床・壁・天井仕上げ材について（機能と性能）
第 3 回　木質系仕上げ材について
第 4 回　左官系仕上げ材について
第 5 回　塗装系仕上げ材について
第 6 回　クロス・シート系仕上げ材について
第 7 回　石材系仕上げ材について
第 8 回　タイル系仕上げ材について
第 9 回　ガラス系仕上げ材について
第 10 回　敷物系仕上げ材について
第 11 回　樹脂・ボード系仕上げ材について
第 12 回　金属・無機ボード系仕上げ材について
第 13 回　建具製品について
第 14 回　実地研修　（住宅展示場見学、レポート提出）
第 15 回　　〃

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、レポート等を課す。
レポート（50 点×2 回）。
欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点とする

[4] 教　　材

村上太一他著『住宅インテリア究極ガイド(改訂版)』（エクスナレッジ 2010））

[5] 参考図書

授業内容に応じた建築・インテリア関連出版物

演習Ⅰ		担当教員	内山　秀樹（うちやま　ひでき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

2年間のまとめとして、環境デザイン分野についての調査研究または制作手法について卒業研究・制作を意識した実践を通して学び、調査研究の場合は仮説の設定、作品制作の場合は試作段階を目標とする。

[2] 授業の計画

第 1回　オリエンテーション（調査研究、制作の手法、発想法など）
第 2回　アイデア出し、リサーチ結果のディスカッション(1)
第 3回　〃　(2)
第 4回　〃　(3)
第 5回　調査研究、制作企画書の作成(1)
第 6回　〃　(2)
第 7回　〃　(3)
第 8回　中間発表会、講評
第 9回　調査研究、試作(1)
第10回　〃　(2)
第11回　〃　(3)
第12回　〃　(4)
第13回　〃　(5)
第14回　〃　(6)
第15回　期末発表会、講評

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
発表会の内容約60%、取り組み姿勢40%のウェイトで評価。
欠席、遅刻、早退は減点する。

[4] 教　　材

必要に応じて適宜、プリント等を配布する。

[5] 参考図書

テーマに合わせて、適宜紹介する。

[6] その他

演習Ⅰ		担当教員	藤（ふじ）　秀（しゅう）　悟（ご）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

「近未来デザイン」のテーマのもと、現在は不可能であっても将来実現すれば我々の生活が安全、快適、幸せになるような夢ある提案をデザインする。

[2] 授業の計画

第 1 回　課題説明、参考作品解説
第 2 回　問題項目の抽出
第 3 回　同上
第 4 回　項目の考察
第 5 回　同上
第 6 回　同上
第 7 回　アイデアスケッチ、ラフスケッチ
第 8 回　同上
第 9 回　同上
第 10 回　試作・制作
第 11 回　同上
第 12 回　同上
第 13 回　プレゼンパネル制作
第 14 回　同上
第 15 回　合評

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
課題作品を評価。ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

材料は各自用意。

演習Ⅰ		担当教員	西畑敏秀（にしばたとしひで）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

ひとつのデザインテーマに対してゼミ形式で、ミーティング、リサーチを行った後、各自がサブテーマを設定し、長期プロジェクトのプランニングから作品制作、展示までを体験する。進行に合わせてコンセプト、デザインプロセスのチェック、個別面談などを行う。また、制作に必要なワークショップや展覧会の鑑賞などを行う。

[2] 授業の計画

第 1回　はじめに　オリエンテーション（研究、制作の手法、発想法など）
第 2回　テーマに関するリサーチ、企画書の準備
第 3回　事例研究1：アイデア、企画
第 4回　事例研究2：アートディレクション
第 5回　事例研究3：コピーライティング
第 6回　事例研究4：ビジュアル（写真）
第 7回　事例研究5：ビジュアル（イラスト）
第 8回　事例研究6：文字（和文書体）
第 9回　事例研究7：文字（欧文書体）
第10回　事例研究8：レイアウト・構成
第11回　中間発表会1：研究、制作の方針
第12回　アイデアの整理
第13回　アイデアの絞込み
第14回　研究・制作企画書のラフスケッチ
第15回　中間発表会2：研究・制作企画案

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。中間報告の内容と表現企画で総合的に評価する。

[4] 教　　材

必要に応じて適宜、プリント等を配布する。

[5] 参考図書

テーマに合わせて、適宜紹介する。

演習Ⅰ		担当教員	前田博子（まえだ ひろこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

ファッション及びテキスタイル分野における幅広い学習を通して商品企画の能力を養う。
各自リサーチを行い、テーマを設定し、作品制作、展示までの体験をする。
作品を完成させるまでのプロセスを学ぶことを達成目標とする。

[2] 授業の計画

第 1回　はじめに　オリエンテーション
第 2回　アイデア出し、リサーチ(1)
第 3回　〃　(2)
第 4回　〃　(3)
第 5回　〃　(4)
第 6回　企画書・デザイン画(1)
第 7回　〃　(2)
第 8回　〃　(3)
第 9回　サンプル制作及び素材研究(1)
第10回　〃　(2)
第11回　〃　(3)
第12回　〃　(4)
第13回　〃　(5)
第14回　〃　(6)
第15回　中間プレゼンテーション

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
提出課題80%、授業態度20%の割合で評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

随時参考図書などを紹介

演習Ⅱ		担当教員	内山　秀樹（うちやま　ひでき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

演習Ⅰの次のステップの演習として、具体的に調査研究または作品の制作を行い、調査研究や作品のプレゼンテーション、展示までを行うことを目的とする。

[2] 授業の計画

第 1 回　夏期休暇中の調査研究・制作の成果報告
第 2 回　研究・制作作業(1)
第 3 回　　〃　　(2)
第 4 回　　〃　　(3)
第 5 回　中間発表会
第 6 回　研究・作品の本作(1)
第 7 回　研究・作品の本作(2)
第 8 回　研究・作品の本作(3)
第 9 回　研究・制作概要案の作成
第 10 回　研究･制作概要の修正
第 11 回　中間発表会
第 12 回　プレゼン資料作成手法について
第 13 回　プレゼン資料案作成
第 14 回　プレゼン資料作成、修正、完成
第 15 回　最終発表会、合評

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。
発表会の内容約 80%、取り組み姿勢 20%のウェイトで評価。
欠席、遅刻、早退は減点する。

[4] 教　　材

必要に応じて適宜、プリント等を配布する。

[5] 参考図書

テーマに合わせて、適宜紹介する。

[6] その他

演習Ⅱ		担当教員	藤（ふじ）　秀（しゅう）悟（ご）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

身のまわりのモノを市場調査し、現在の生活がより安全、快適、幸せになるように生活に密着した提案をデザインする。

[2] 授業の計画

第 1 回　課題説明、参考作品解説
第 2 回　問題項目の抽出
第 3 回　同上
第 4 回　項目の考察
第 5 回　同上
第 6 回　同上
第 7 回　アイデアスケッチ、ラフスケッチ
第 8 回　同上
第 9 回　同上
第 10 回　試作・制作
第 11 回　同上
第 12 回　同上
第 13 回　プレゼンパネル制作
第 14 回　同上
第 15 回　合評

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

課題作品を評価。ただし、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

材料は各自用意。

演習Ⅱ		担当教員	西畑敏秀（にしばたとしひで）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

2年間のまとめとして、調査研究または制作手法について実践を通して学ぶ。

住宅・インテリア・エクステリア、広場・公園計画、パブリックアート、まちづくりなど、環境デザインに関するテーマについて事例研究を行った上で、テーマをしぼりこみ、その進め方や、手法、テーマの発想法などについて学んだ上で、具体的に調査研究または作品の制作を行う。テーマによってはフィールドワークも交え、実践的学習を行う。

[2] 授業の計画

第 1回　中間発表会3：夏期休暇中の成果報告
第 2回　研究・制作作業(1)
第 3回　研究・制作作業(2)
第 4回　研究・制作作業(3)
第 5回　中間発表会4：研究・作品の中間報告
第 6回　研究・制作作業(4)
第 7回　研究・制作作業(5)
第 8回　研究論文・作品の仕上げ
第 9回　研究･制作概要案の作成
第10回　研究･制作概要の修正
第11回　中間発表会5：研究・作品について
第12回　プレゼンの手法と資料について
第13回　プレゼン資料作成
第14回　プレゼン資料作成、修正、完成
第15回　最終発表会、合評

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しない。最終発表会の報告内容で総合的に評価する。

[4] 教　　材

必要に応じて適宜、プリント等を配布する。

[5] 参考図書

テーマに合わせて、適宜紹介する。

演習Ⅱ		担当教員	前田博子（まえだ ひろこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	1単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

ファッション及びテキスタイル分野における幅広い学習を通して商品企画の能力を養う。各自リサーチを行い、テーマを設定し、作品制作、展示、販売までのプロセスを体験する。自ら企画立案した工程を生かし、それらのプレゼンテーション行うことを達成目標とする。

[2] 授業の計画

第1回　制作、チェック(1)
第2回　〃　(2)
第3回　〃　(3)
第4回　〃　(4)
第5回　〃　(5)
第6回　〃　(6)
第7回　中間合評
第8回　制作、チェック(7)
第9回　〃　(8)
第10回　〃　(9)
第11回　〃　(10)
第12回　プレゼン資料作成(1)
第13回　〃　(2)
第14回　〃　(3)
第15回　まとめ　合評と評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
提出課題80%、授業態度20%の割合で評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

スケッチブック、裁縫道具、筆記用具など制作に必要なものは各自で準備。

[5] 参考図書

随時参考図書などを紹介

卒業研究		担当教員	藤原 正敏 他（ふじわら まさとし）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	必修

[1] 授業のねらい

卒業研究の目的は、特定の主題について主体的に研究を行うことにより、専門的な知識技術を深めることにある。また、卒業研究を通して以下のような研究・調査や制作の進め方の技術が修得できることをねらいとしている。

(1)研究とはいかなるものであるか。
(2)研究の実施に必要な準備と計画に関する知識。
(3)参考文献・図書の調べ方。
(4)実験・調査・制作の実際。
(5)研究結果のまとめ方および結論の導き方。
(6)発表の要領。

[2] 授業の計画

［生活環境専攻］

生活環境系の調査などをする。
デザイン系のビジュアル、ファッション、環境、プロダクトなどの分野について各自関心のあるテーマについて研究制作をする。

［生活情報専攻］

情報管理コース：情報処理・会計学・経営科学等の分野についての研究を行う。研究はグループごとに主題を定め、指導教員の指示に従い、主として演習形式で行うが、主題によっては異なった形式で行う場合もある。

ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｺｰｽ：「英語」にかかわる研究テーマについて、主として演習形式で、英語に関する資料、文献、視聴覚機器などを用いて研究を進める。

［食物栄養専攻］

「食や健康」にかかわる研究テーマについて、調査・実験・実習・文献検索等の手法を用いて研究および制作などを進める。

[3] 評価の方法

成績の評価は研究態度、研究報告書、研究要旨および発表会の内容を勘案の上、
学則第 24 条及び履修規程第 18 条により行う。

[4] 教　　材

卒業研究指導担当者の指示を受けること。

[5] 参考図書

授業以外の時間をフルに活用し、十分な研究成果が得られるように努力すること。

生活経営学		担当教員	高田洋子（たかだ ようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

私たちは、現在、自分以外の人が作ったモノ、あるいは人が提供してくれるサービスを消費することなくして生活することはできない。よりよい消費は生活の質を確保する１つの手段である。しかしながら、消費に関する問題は後をたたない。現代の消費の問題を把握するとともに、具体的な消費の問題を考えることを通じて、消費のトラブルの未然防止の力をつけていくことを目的とする。

[2] 授業の計画

第　1回　登録
第　2回　消費者とは何か、消費者問題とは何か、近年の消費者問題
第　3回　契約って何？、契約書を読んでみよう、書いてみよう
第　4回　特殊販売と問題商法、悪徳商法のいろいろⅠ
第　5回　悪徳商法のいろいろⅡ、クーリングオフを学ぶ
第　6回　日本の契約における課題、消費者契約法
第　7回　契約の解約をしてみよう（クーリングオフ、消費者契約法）
第　8回　欠陥商品とは
第　9回　ＰＬ法
第10回　住宅の欠陥
第11回　消費者行政
第12回　消費者信用１（販売信用）
第13回　消費者信用２（消費者金融）
第14回　クレジットカードと金銭管理
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

ミニテスト（授業中に行う）、レポートおよび毎回の提出物によって評価する。

[4] 教　　材

大藪千穂「お金と暮らしの生活術」（昭和堂，2006年）

[5] 参考図書

授業の中で紹介する。

保育学		担当教員	海道　洋子（かいどう　ようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

この保育学は家庭科の教員や保育士といった専門家養成のための講義ではなく、ごく一般の学生を対象にして、子どもが育つこと、子どもを育てることに思いをはせ、自分自身が育ってきた過程や子ども時代を振り返り、人が人として育つことの意義や子どもの成長の奥深さを感知し、当然もっていて欲しい常識のレベルでの「教養としての保育学」にしたい。

少子高齢社会といわれる現代では、昔のように子どもの育っていく姿を家庭の中で見る事はほとんど不可能である。弟妹・甥姪の世話を手伝いながら、自然に子育てを学ぶ機会はまずなくなったと言って良いだろう。したがって次代を担う子ども達の保育（乳幼児がより良い方向に育てられるように援助すること）を授業の中で学ぶ事は意義のあることと思う。

学生が自分の問題として、保育（子育て）に興味が持てるように進めていく。内容としては発達特徴と子どもの気持ちに寄り添った具体的なかかわりを学んでいく。子どもの遊びや年齢に適した絵本を紹介したり、教科書や VTR を用いたりして授業を展開する。楽しく、しかし真剣に学んでもらいたい。

[2] 授業の計画

第 1 回　保育学とは何か（オリエンテーションを兼ねて）
第 2 回　保育の歴史と現状
第 3 回　子どもの心身の発達と遊び　①（出生～6 か月）
第 4 回　　〃　　②（6 か月～1 歳 3 カ月）
第 5 回　　〃　　③（1 歳 3 カ月～2 歳）
第 6 回　　〃　　④（2 歳）
第 7 回　　〃　　⑤（3 歳）
第 8 回　　〃　　⑥（4 歳）
第 9 回　　〃　　⑦（5 歳）
第 10 回　　〃　　⑧（6 歳）
第 11 回　家庭、小学校、地域社会との連携
第 12 回　少子高齢社会における子育て①（子育て支援制度）
第 13 回　　〃　　②（子育て支援の実情）
第 14 回　子どもを取り巻く環境を考える①（児童虐待）
第 15 回　　〃　　②（児童虐待の実情）

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験　　100 点
欠席、遅刻・早退については減点する。
その他　　授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）についても減点する。

[4] 教　　材

改訂・保育士養成講座編纂委員会/編　『保育原理』（全国社会福祉協議会 2010・4 月）

人間関係論		担当教員	清水（しみず）　聡（さとし）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

複数の人間が近くに存在する、あるいは一緒に活動している社会的場面において、人間がどのように考え、行動するのかについて学ぶ。授業では、社会的場面における個人の心理的過程、対人行動、集団と個人の関係、人間関係の形成などに関する代表的なトピックスを取り上げて概説する。

[2] 授業の計画

第 1 回　集団と個人 1
第 2 回　集団と個人 2
第 3 回　集団と個人 3
第 4 回　態度と態度変容
第 5 回　社会的影響
第 6 回　リーダーとリーダーシップ 1
第 7 回　リーダーとリーダーシップ 2
第 8 回　社会的認知 1
第 9 回　社会的認知 2
第 10 回　自己 1
第 11 回　自己 2
第 12 回　魅力と対人関係 1
第 13 回　魅力と対人関係 2
第 14 回　援助と攻撃 1
第 15 回　援助と攻撃 2

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、レポート及び小テストにて評価する。
レポート　30 点、講義中程に課す。内容は講義中に指示する。
小テスト　70 点、毎回の講義の冒頭に行う。各 5 点ずつ。（第 1 回目は実施しない）

[4] 教　　材

テキストは使用しない。適宜プリントを配布する。

[5] 参考図書

講義中に指示する。

生活情報論		担当教員	田中洋一（たなか よういち）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	必修

[1] 授業のねらい

情報技術や社会環境の変化のため、現代社会には「いつでも・どこにでも・だれにでも」情報があふれています。情報の伝達方法や情報倫理を学びながら、多くの情報の中から必要な情報を獲得（受信）し、他者に対して最適に表現（発信）する力を身につけましょう。

また、わかりやすさ・つかいやすさを理解し、他者の視点を知ることにより、コミュニケーションについて考えてもらいます。本講義のトピックを通して、情報社会に生活するヒトにとって大切な普遍的なモノ・コトを見つけてほしい。

[2] 授業の計画

第 1回　ガイダンス、大学での勉強のしかた（ノートの取り方、レポートの書き方）
第 2回　検索のしかた（レポートを書くための Web 活用法）
第 3回　発想のしかた
第 4回　データと情報
第 5回　メディアとコミュニケーション
第 6回　人間とコンピュータ
第 7回　アフォーダンスと身体性
第 8回　障がい理解とバリアフリー
第 9回　ユニバーサルデザイン
第 10回　Web とユーザビリティ
第 11回　アクセシビリティと支援技術
第 12回　ウェブ制作者にとってのアクセシビリティ
第 13回　ユニバーサルデザイン企画の相互評価
第 14回　著作権
第 15回　個人情報

[3] 評価の方法

試験期間中の筆記試験を 80%、課題を 20%で評価します。ただし、欠席・遅刻・早退、授業態度により減点する場合があります。詳細は、第 1 回目のガイダンスで説明します。
一つでも未提出の課題がある場合は、原則として不合格の評価とします。

[4] 教　　材

e-Learning 上に授業で用いたスライドや課題を提示します。

[5] 参考図書

回陽博史『情報と人間』(オーム社 2003)、川合慧・駒谷昇一『情報と社会』(オーム社 2004)、仁愛大学コミュニケーション学科編『コミュニケーションをデザインする』(行路社 2003)、藤田哲也『大学基礎講座』(北大路書房 2006)、小笠原喜康『インターネット完全活用編大学生のためのレポート・論文術』(講談社 2003)、矢内秋生他『ネットワーク・生活情報論』(同文書院 2000)

[6] その他

質問等がある場合は、研究室前に掲示してあるオフィスアワー等を利用するか、電子メールで連絡してください。

情報ネットワーク		担当教員	藤原正敏（ふじわらまさとし）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

家庭から、会社からインターネットにアクセスしたり、携帯電話でメールのやりとりをしたり、情報通信技術なしには、毎日の生活ができない昨今です。本教科では、インターネットで使われる基本的なしくみや技術、インターネットを安全に使うための知識について学ぶ。

まず、扱われる情報のデジタル表現法について学ぶ。次に、データ通信のしくみを詳しく学ぶ。次に、安全にネットワークを利用するために、インターネットの問題点、セキュリティ対策について学ぶ。最後に、家庭内ＬＡＮを実際に構築するための実習を行い、ファイル共有、プリンタ共有、電子メール、Ｗｅｂ閲覧の設定を行う。

[2] 授業の計画

第 1回　ネットワークとは？
第 2回　デジタル表現について
第 3回　インターネットの基礎知識　ＩＰアドレス、ドメインネーム、サーバ
第 4回　インターネットの通信体系、約束事、通信プロトコルについて
第 5回　ＯＳＩ参照モデルについて
第 6回　ＴＣＰ／ＩＰによるデータ通信について
第 7回　ＴＣＰ／ＩＰにおける各層の役割について
第 8回　中間まとめ
第 9回　通信相手の識別、ＩＰアドレス、ＭＡＣアドレス、ポート番号について
第10回　通信経路の選択と通信の手順
第11回　ルータの役割、ルーティング
第12回　さまざまなネットワークサービスとそのしくみ
第13回　ネットワークを安全に利用するためのしくみ
第14回　新しいネットワーク活用法
第15回　総まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
課題「講義のまとめ」（ほぼ毎回）50%、定期試験 50%の割合で総合的に評価する。

[4] 教　　材

音葉　哲『インターネットのつながるしくみ』（日東書院）
配布プリント、moodle 上の講義資料

[5] 参考図書

森川　恵『初歩からのネットワーク』（実教出版）
藤原正敏他『ネットワーク社会における情報の活用の技術』改訂版（実教出版）
三輪賢一『かんたんネットワーク入門』（技術評論社）

情報メディア		担当教員	島田貢明（しまだ みつあき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

メディアは情報の媒体を意味する。具体的な例をあげれば、印刷メディア（新聞、雑誌、書籍等）や画像・音声メディア（写真、テレビ、ラジオ等）などがある。しかし、「メディアの融合」という言葉で表現されるように、従来の情報はデジタル化することでコンピュータを用いて編集・加工が可能となっている。本講義は、このような現状をふまえ一般生活及び企業活動においてメディアが果たす役割とそれにかかわる基礎技術を理解することをねらいとする。

[2] 授業の計画

メディアを「人間が直接情報に接する媒体」としてとらえ、これに関わるメディア技術を情報機器と活用事例を関連づけながら解説する。

第 1回　メディアの技術史
第 2回　コンピュータの歴史
第 3回　メディアにおけるコンピュータの役割
第 4回　インターネットと情報メディア（DTP）
第 5回　インターネットと情報メディア（ｅラーニング）
第 6回　インターネットと情報メディアまとめ
第 7回　映像メディア（画像処理）
第 8回　映像メディア（デジタルカメラ）
第 9回　映像メディアのまとめ(作品提出)
第10回　音声メディアの実際（音響学）
第11回　音声メディアの実際（音声処理）
第12回　音声メディアのまとめ
第13回　情報メディアの将来（画像認識）
第14回　情報メディアの将来（音声認識）
第15回　情報メディアの将来のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
作品等の課題を 50%、授業のレポートを 50%として評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

プリントを資料として配付する。

[5] 参考図書

二村　健『情報メディアの活用』(学文社　2006)
映像情報メディア学会『映像情報メディア用語辞典』(コロナ社　2005)
電通総研『情報メディア白書 2006』(ダイヤモンド社　2005)
日本音響学会『音の何でも辞典』(講談社　2004)

情報表現法		担当教員	諏訪（すわ） いずみ
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

インターネットや情報機器の急速な発展により，大量の情報を日常的に扱う社会となってきた。このため、データの集まりを処理・統合し，意味のある情報へと変換するという計算のみではないコンピュータの情報処理機能を理解することが求められている。

この講義では，情報とは何か，どのように表現されているのか，どのように扱われているのかについて，コンピュータが行っている作業の概要を演習や作業を交えて学習し，理解することをねらいとする。また，コンピュータを使うと何ができるのか，また何ができないかといった疑問を情報科学の視点に立って解き明かし，理解することもねらいとする。

[2] 授業の計画

第 1 回　ガイダンス＆情報表現法概説
第 2 回　情報とは？ 情報の表現と情報処理
第 3 回　数字の表現と計算
第 4 回　計算のアルゴリズムとコンピュータ
第 5 回　コンピュータの内部表現（論理表現）
第 6 回　コンピュータの内部表現（実装表現）
第 7 回　コンピュータの基本構成
第 8 回　並べ替えのアルゴリズム
第 9 回　数式計算のアルゴリズム
第 10 回　推論のアルゴリズム
第 11 回　帰納と再帰のアルゴリズム
第 12 回　文の生成アルゴリズム
第 13 回　コンピュータは何ができるか
第 14 回　コンピュータは何ができないか
第 15 回　まとめ（コンピュータの現在）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施せず、課題・レポートを課す。
毎回提出する課題レポート：65%、期末課題レポート：35%で評価する。
欠席・遅刻・早退及び授業進行の妨げになる行為（私語・携帯電話）は減点する。

[4] 教　　材

小倉和久『情報科学の基礎論への招待』(近代科学社 1998)
毎回の授業ごとに配るまとめプリント

[5] その他

筆記用具とハサミとノリ（作業に必要）

情報管理		担当教員	島田貢明（しまだ みつあき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

膨大な情報がデータベースやホームページとして蓄積・公開され、必要な情報をインターネットで簡単に入手することができる今日、ネット利用した情報検索は日常的に行われる行為である。そのための検索手段として、より使いやすい検索ツールが、日々改良され提供されている。しかし、これらから真に必要な情報を、的確かつ効率的に検索するためには、検索すべき主題を分析し、適切なキーワードを用いて、論理的に表現できる能力が求められる。かつては専門家の仕事であった情報検索技術は、現代においてはその基本的な考え方や技術を各個人が身につけておくべき情報リテラシーの一つとも考えられる。さらに、ソフトウェア環境の向上により、個人レベルでデータベースを作成し、自ら情報を利用しやすい形で整理・保存し、これを提供していくことも容易になっている。この授業では、これらの基礎となる情報の整理・分類および情報検索の論理など、情報管理の基礎知識を学習した上で、実際にデータベース検索演習を行い、適切な検索式の与え方を身につける。また、後半においては情報検索型のデータベース作成の演習を行い、情報検索のための保存・蓄積・提供から検索利用までの一連の知識を修得する。

[2] 授業の計画

第 1回　情報管理と情報検索（情報管理のプロセス／情報の収集と整理）
第 2回　情報の種類と分類（一次・二次情報／内部・外部情報）
第 3回　情報検索とデータベース（データベースの種類と実際）
第 4回　報検索のための情報加工(1)（キーワードの抽出／分類とコード化）
第 5回　検索のための情報加工(2)（自然語と統制語／シソーラス）
第 6回　情報検索の手順(1)（検索手順／検索戦略と結果の評価）
第 7回　情報検索の手順(2)（検索式と論理演算）
第 8回　データベース検索演習(1)（CD-ROMデータベースの使用法及び検索実習）
第 9回　データベースの作成(1)　（データベースの構造と設計、入力データ作成）
第10回　データベース検索演習(2)（入力データ作成を含む）
第11回　データベース検索演習(3)（入力データ作成を含む）
第12回　データベースの作成(2)　（テーブルの作成とクエリーの基礎）
第13回　データベースの作成(3)　（キーワード入力とパラメータ・クエリー）
第14回　データベースの作成(4)　（利用者インターフェースの作成と検索実習）
第15回　データベース検索のまとめと筆記試験

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
中間の筆記試験を60%、課題等の提出物を40%として評価する。
欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

テキスト:CD-ROMで学ぶ『情報検索の演習』新訂3版
(情報科学技術協会編・日外アソシエーツ)

[5] **参考図書**

緑川信之『図書館・情報メディア双書６－情報検索の考え方』（勉誠出版）／情報科学技術協会編『情報検索の基礎』（紀伊国屋書店）／情報科学技術協会編『情報の管理と検索』（社団法人　情報科学技術協会）／神門　典子ほか『全文検索－技術と応用』（丸善株式会社）／『よくわかる ACCESS・基礎』（FOM 出版）ほか各種 MS-ACCESS 入門及び解説書

情報数学		担当教員	諏訪（すわ） いずみ
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

表計算ソフトには、基本的な集計機能はもちろん、グラフ作成や、データベース利用のほか、数多くの機能が「関数」として準備されている。これらを利用して、さまざまな数学的な情報処理、シミュレーションや統計処理がＰＣ上で手軽に行える。しかし、組み込まれている各種の関数を使いこなしていくためには、関数の意味や使用する上での基本的な数学の知識も必要となる。授業では、高等学校段階での数学の復習を兼ねながら、情報処理に関係する基礎的な数学的話題と統計に関する話題を選び、解説と演習を行い、情報処理に関連した数学的知識を高めることを目標とする。演習は、表計算ソフト Excel を使用し、数学関数、統計関数に習熟することで表計算ソフトの利用技術を養うこともねらいとする。

[2] 授業の計画

第 1回　情報数学と関数
第 2回　Excel 関数入門
第 3回　数学関数(1) 簡単なデータ処理
第 4回　数学関数(2) 2次関数とグラフ
第 5回　数学関数(3) 連立1次方程式を解く (1)
第 6回　数学関数(3) 連立1次方程式を解く (2)
第 7回　数学関数(4) 指数関数と対数関数
第 8回　数学関数(5) 三角関数の基礎
第 9回　数学関数(6) 三角関数の応用
第10回　表計算と統計(1) 基本的な統計関数
第11回　表計算と統計(2) 基本的統計関数の利用
第12回　表計算と統計(3) 相関
第13回　表計算と統計(4) 回帰分析
第14回　表計算と統計(5) モデルと予測
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験と課題で評価する。
毎回の課題：50%、講義期間内の課題２回：20%、試験：30%で評価する。
欠席・遅刻・早退及び授業進行の妨げになる行為（私語・携帯電話）は減点する。

[4] 教　　材

『Excel 関数辞典』(秀和システム)
講義内容・課題に関するプリントを配布する。

[5] 参考図書

『Excel で学ぶやさしい数学』(オーム社)
『Excel でかんたん統計分析』(オーム社)

基礎プログラミングⅠ		担当教員	篭谷隆弘（かごやたかひろ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	必修

[1] 授業のねらい

情報化社会では、パーソナルコンピュータやネットワークを活用することで、次々と発生する情報を効率よく分類・蓄積し、さらにその大量のデータの中から必要なものを検索することが可能である。これらはデータベースを中心とするシステムによって実現されている。

この授業では、Microsoft 社のデータベースソフトウェア Access を用いて、データベース設計およびデータ処理のためのプログラミングを通して、より実践的な業務システムの構築方法を学ぶ。

[2] 授業の計画

第 1回　授業概要、データベースについて
第 2回　Access 概要
第 3回　テーブル設計とデータ入力
第 4回　リレーションシップ
第 5回　クエリ設計
第 6回　フィールド操作
第 7回　フォーム設計
第 8回　フォーム編集
第 9回　クエリによるレコードの抽出
第10回　クエリによる集計
第11回　レポート設計
第12回　レポート編集
第13回　宛名ラベル
第14回　ピボットテーブル･ピボットグラフ
第15回　まとめ・総合問題
第16回　作成するデータベースの概要
第17回　フィールドプロパティ
第18回　リレーションシップと参照整合性
第19回　演算フィールドと関数の利用
第20回　クエリフィールドプロパティ
第21回　アクションクエリ
（テーブル作成・削除クエリ）
第22回　アクションクエリ（追加・更新）
第23回　メイン・サブフォーム
第24回　メイン・サブレポート
第25回　集計・累計・改ページ
第26回　マクロの作成
第27回　VBA の利用
第28回　Microsoft Office Specialist
受験対策（1）
第29回　Microsoft Office Specialist
受験対策（2）
第30回　Microsoft Office Specialist
受験対策（3）

[3] 評価の方法

週毎に課す全ての課題を提出することを必要条件とする。期末に行う実技試験にて評価する。Microsoft Certified Appliication Specialist（Access）を受験した場合は、試験成績として換算する。これらの点数に出席率を乗じて評価する。

[4] 教　　材

『よくわかる Microsoft Office Access 2010 基礎』(FOM 出版)
『よくわかる Microsoft Office Access 2010 応用』(FOM 出版)
『よくわかる Microsoft Office Access 2010 ドリル』(FOM 出版)
『MCAS Microsoft Office Access 2010 完全マスター』(FOM 出版)

[5] 参考図書

市販の Microsoft Access に関する書籍を参考にするとよい。

応用プログラミングⅠ		担当教員	平塚　紘一郎（ひらつか　こういちろう）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

この授業では、Microsoft 社の Visual Basic (VB) を利用し、ゲーム作成を通してプログラミングの基礎を学ぶ。VB は Windows のユーザインターフェースを視覚的に配置でき、また様々な処理のためのプログラミングコードも用意されており、初心者から本格的な開発を行う技術者までに対応できるプログラミング言語である。

プログラム制作を楽しみながら論理的な考え方やソフトウェアの基本的な仕組を学習していただきたい。

[2] 授業の計画

（前期）

第 1 回　VB の概要と基本操作
第 2 回　コントロール、プロパティ、イベント関数
第 3 回　第1章練習問題
第 4 回　データ型、変数とキャスト
第 5 回　演算子の種類、優先順位
第 6 回　数あてゲームの作成
第 7 回　第2章練習問題
第 8 回　定数、分岐処理（if）
第 9 回　分岐処理（select case）
第 10 回　プロシージャ
第 11 回　おみくじゲームの作成
第 12 回　第3章練習問題
第 13 回　前期復習課題の説明
第 14 回　前期復習課題(1)
第 15 回　前期復習課題(2)

（後期）

第 16 回　様々なコントロールの使用(1)
第 17 回　様々なコントロールの使用(2)
第 18 回　じゃんけんゲームの作成(1)
第 19 回　じゃんけんゲームの作成(2)
第 20 回　第4章練習問題
第 21 回　一次元配列
第 22 回　二次元配列
第 23 回　繰り返し処理（for）
第 24 回　繰り返し処理（while）
第 25 回　タイピングゲームの作成(1)
第 26 回　タイピングゲームの作成(2)
第 27 回　第5章練習問題
第 28 回　後期復習課題の説明
第 29 回　後期復習課題(1)
第 30 回　後期復習課題(2)

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

小課題（5 点 × 10）および学期末に課す復習課題（25 点 × 2）の合計にて評価点を求める。

欠席・遅刻・早退および授業進行の妨げとなる行為は減点とする。

[4] 教　　材

e-Learning 教材

中島省吾『ゲーム作りで学ぶ Visual Basic 2010 入門』(エスシーシー 2010)

[5] 参考図書

市販の Visual Basic に関する書籍など。

基礎プログラミングⅡ		担当教員	久保長徳（くぼたけのり）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

現在コンピュータやインターネットの利用が企業の業務において不可欠なスキルになっている。プログラム作成等のコンピュータによる問題解決を経験することは、業務においてコンピュータをより有効に利用するために重要な意味をもつ。本講義では多くのプログラミング言語の基礎となった C 言語とその進化形である C++言語を題材にプログラミングについて基礎的な事項を解説し実際にアプリケーションを作成する。Visual C++の基礎を理解することで Windows 上で動くアプリケーションの作成法とその仕組みを理解し、パソコンを幅広く活用できる能力を身につけることをねらいとする。

[2] 授業の計画

第 1 回　Visual C++によるプログラム開発方法
第 2 回　変数，関数，if 文
第 3 回　配列，繰り返し
第 4 回　入出力，文字列操作
第 5 回　探索
第 6 回　整列
第 7 回　整列 2
第 8 回　データ構造
第 9 回　データ構造 2
第 10 回　構文解析
第 11 回　構文解析 2
第 12 回　構文解析 3
第 13 回　総合課題１（設計）
第 14 回　総合課題１（作成）
第 15 回　総合課題 1 の相互評価
第 16 回　オブジェクト指向とクラス
第 17 回　ライブラリと GUI
第 18 回　GUI 利用法：GUI 部品
第 19 回　練習問題
第 20 回　GUI 利用法：マウス操作
第 21 回　練習問題
第 22 回　GUI 利用法：グラフィック表示
第 23 回　練習問題
第 24 回　ライブラリの利用：マルチメディア
第 25 回　ライブラリの利用：インターネット
第 26 回　練習問題
第 27 回　練習問題
第 28 回　総合課題２(設計)
第 29 回　総合課題２(作成)
第 30 回　総合課題２の相互評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
総合課題と各種提出物の内容により評価する(計 100 点満点)。
最後に点数に出席率を乗じて成績とする。
授業態度が著しく良くない場合は減点もしくは欠席扱いとする。

[4] 教　　材

e-Learning 教材。
内容に応じて説明や課題のためのプリントを配布する。

[5] 参考図書

河西朝雄『Visual C++プログラミングブック』(技術評論社 2000)
奥村晴彦『C 言語による最新アルゴリズム辞典』(技術評論社 1991)
粂井康隆『猫でもわかる C 言語プログラミング』(2008)
粂井康隆『猫でもわかる C++言語プログラミング』(2009)
粂井康隆『猫でもわかる Windows プログラミング』(2008)

[6] その他

課題は講義内容に連動しているので提出期限を厳守すること。実習課題は時間外にしなければならないことも多いので自分自身で対処する力を身につけてほしい。

応用プログラミングⅡ		担当教員	藤原正敏（ふじわらまさとし）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

高度情報化社会においては、パソコンやインターネット等の情報通信技術処理を活用する能力が求められている。そのため、情報ネットワークや情報処理システムの基本的な仕組みなど情報通信技術について学び、理解を深める。

次に、情報通信技術を日常業務に活用するための基本的な素養を、具体的な事例を通して学ぶ。技術革新の目覚しい未来の情報システムについても学ぶ。

[2] 授業の計画

第 1 回　問題を知る（問題の分析）
第 2 回　問題の処理手順と流れ図
第 3 回　アルゴリズムの考え方
第 4 回　プログラムとは
第 5 回　Ｃプログラムの構造とスタイル
第 6 回　Ｃプログラムを書いてみよう
第 7 回　Ｃプログラムを動かしてみよう
第 8 回　問題の処理手順とプログラム
第 9 回　データの型について
第 10 回　メッセージの出力
第 11 回　データの型について
第 12 回　データの型宣言
第 13 回　データの入出力書式
第 14 回　代入文
第 15 回　前期のまとめ
第 16 回　前期の復習
第 17 回　関数について
第 18 回　演算子と計算順序
第 19 回　データの型と計算結果
第 20 回　関数を使った計算
第 21 回　処理の流れを変える－条件分岐
第 22 回　処理の流れを変える－繰り返し
第 23 回　処理の流れを変える－特殊な流れ
第 24 回　関数とは何だろう
第 25 回　引数をもたない関数
第 26 回　引数をもった関数
第 27 回　関数を使ったプログラム
第 28 回　配列について
第 29 回　文字列の処理
第 30 回　後期のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

プログラミング演習課題を 50 点、試験を 50 点、の割合で評価する。

[4] 教　　材

斎藤奈保子他『はじめて学ぶＣ言語入門』（実務出版）

moodle 上の講義資料、配布プリント

[5] 参考図書

Ｃ言語プログラミングに関する書籍

文章・言語表現		担当教員	天野義廣（あまの よしひろ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

社会人として日常生活やビジネスの場で必要とされる日本語の適切な使い方について学ぶ。言語表現には文章表現と談話表現とがある。その両方について、伝達したい内容を有効に表現できる知識や技術を身に付ける。

[2] 授業の計画

第 1 回　さまざまな文章
第 2 回　原稿用紙の用法
第 3 回　文章の構成
第 4 回　誤用文と推敲
第 5 回　修辞法と慣用句
第 6 回　漢字の表記
第 7 回　社会生活と自己表現
第 8 回　手紙とはがき
第 9 回　案内状の作成
第 10 回　レポート作成の準備
第 11 回　引用と要約
第 12 回　話すことの基本とスピーチ
第 13 回　敬語
第 14 回　間違いやすい敬語（1）
第 15 回　間違いやすい敬語（2）

上記以外の事柄についても適宜プリント教材を用いながら取り扱う。

[3] 評価の方法

試験期間中に実施する試験 50%、毎回の課題 50%の割合で評価する。
欠席、遅刻、早退については減点する。
なお授業進行に妨げとなる行為（私語、携帯電話など）についても減点する。

[4] 教　　材

西尾宣明編『日本語表現法―書く技術・話す技術』（株式会社樹村房　2005 年発行）
他に毎回プリント教材を配付する。

[5] 参考図書

授業中に適宜紹介する。

[6] その他

・学習成果を高めるため、毎回学習課題を出し提出を求める。それらの課題に真剣に取り組むこと。
・授業には国語辞書（電子辞書可）を持参し、積極的に使用すること。
・質問を歓迎する。

コミュニケーション演習		担当教員	Casey D. Johnson（ケイシー ジョンソン）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

英語のオーラル・コミュニケーション能力を養う。外国人の英語教育専門家が日本人の学習者を念頭において作った教科書を用いる。部分的には読むこと、書くこと、文法学習の作業も入るが、主として英語を聞くこと、話すことの学習を目標とする。したがって、ペアやグループでの活動がたくさん行われることになる。積極的な態度で授業に取り組むよう期待する。

[2] 授業の計画

第 1 回	Unit Zero
第 2 回～第 7 回	Unit 1 ～ Unit 3
第 8 回	中間のまとめ
第 9 回～第 14 回	Unit 4 ～ Unit 6
第 15 回	Review Unit 1
第 16 回～第 21 回	Unit 7 ～ Unit 9
第 22 回	中間のまとめ
第 23 回～第 28 回	Unit 10 ～ Unit 12
第 29 回	Review Unit 2
第 30 回	年度末のまとめ

[3] 評価の方法

次のものを総合して評価する。

・試験期間中の試験の成績

・クラスワーク（クラス中に、グループやペアに分かれておこなう）

・毎回の授業の授業態度（欠席、遅刻、早退は減点の対象とする）

[4] 教　　材

Marc Helgesen, et al.『English Firsthand 2 (New Gold Edition)』(Longman)

プレゼンテーション演習		担当教員	島田貢明（しまだ みつあき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

実際にプレゼンテーションを実践するためには提起・提案、解釈・学習、報告・評価活動の各段階を理解することが必要である。これらの各段階における情報の視覚化・マルチメディア化の演習を通して「コンピュータをプレゼンテーションの道具として利用する」総合力を身につけることをねらいとする。

[2] 授業の計画

第 1 回　プレゼンテーションとは
第 2 回　Word との連携
第 3 回　アイデアのアウトライン化
第 4 回　ストーリーの作成
第 5 回　Power Point とは
第 6 回　スライドの作成方法
第 7 回　デザインテンプレートとは
第 8 回　デザインテンプレートの利用
第 9 回　イラストの利用
第 10 回　写真の利用
第 11 回　スライドショーの作成
第 12 回　動画の利用
第 13 回　動画編集
第 14 回　グラフの作成
第 15 回　グラフの利用とアニメーション効果
第 16 回　スライドマスタとは
第 17 回　リハーサル機能とは
第 18 回　リハーサルの方法
第 19 回　効果的な話し方(1)
第 20 回　効果的な話し方(2)
第 21 回　心構え
第 22 回　質疑・応答の方法
第 23 回　ﾃﾞｼﾞﾀﾙ・ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝにおける PDCA の実際
第 24 回　ノートの記入
第 25 回　スライドの配色
第 26 回　時間配分
第 27 回　発表と相互評価(1)
第 28 回　発表と相互評価(2)
第 29 回　発表と相互評価(3)
第 30 回　発表のまとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。
総合課題の発表の結果を 60%、課題等の提出物及び授業態度を 40%として評価する。
ただし、一人 2 回以上の発表を原則とする。

[4] 教　　材

プロジェクト A&できるシリーズ編集部『できる PowerPoint2007』(インプレス 2007)

[5] 参考図書

特になし

プレゼンテーション演習		担当教員	内藤　徹（ないとう　とおる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

このクラスでは、プレゼンテーションの基本から応用まで幅広く学び、効果的なプレゼンテーションができるようになることを目指します。コンピュータでパワーポイントを用いてより効果的なプレゼンテーションができるようになります。

授業の形態はペアからグループによる演習、そしてより多くの人前で話す演習を行います。Physical→Oral→Visual→Organizational→Integrated などの段階を設定し、易から難への英語のパラグラフを意識した発話を習得します。ただ話すだけでは効果的とはいえません。いかに、聴衆を引き付け納得させるかなどの技法が必要です。授業の中では、効果的なプレゼンテーション技法についても学びます。

[2] 授業の計画

Lesson 1 Introduction of Presentation
Lesson 2 Reading
Lesson 3 Physical Aspects
Lesson 4 〃 Send Your Non-verbal Messages
Lesson 5 Oral Aspects
Lesson 6 〃 Making a Telling Delivery!
Lesson 7 Presentation 1
Lesson 8 Visual Aspects (1)
Lesson 9 〃 Let's Choose the Media
Lesson 10 Visual Aspects (2)
Lesson 11 〃 Let's Process Data!
Lesson 12 Visual Aspects (3)
Lesson 13 〃 Let's Design Visual Aids!
Lesson 14 Presentation 2
Lesson 15 Organizational Aspects (1)
Lesson 16 〃 Learn Presentation Formats!
Lesson 17 Organizational Aspects (2)
Lesson 18 〃 Learn Presentation Structure!
Lesson 19 Presentation 3
Lesson 20 Presentation Performance
Lesson 21 〃 Make a Demonstration Speech
Lesson 22 Integrated Presentation (1)
Lesson 23 〃 Summarize a Text!
Lesson 24 Presentation 4
Lesson 25 Integrated Presentation (2)
Lesson 26 〃 Research and Deliver
Lesson 27 Presentation 5
Lesson 28 How to Collect Materials
Lesson 29 Plagiarism and Citation
Lesson 30 Presentation 6

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。試験(30%)、各単元でのパブリック・スピーキング(10%)、そして各セクションでのパワーポイントを用いたプレゼンテーション(60%)で評価します。

授業中の演習が重要なので、出欠席も厳しく評価します。

[4] 教　　材

JACET Materials Development Group 編『Power Presentation』(三修社 2004)

その他配布する教材　など

ドキュメンテーション演習		担当教員	内藤（ないとう） 徹（とおる） ・野本（のもと） 尚美（なおみ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

今や e-mail は友人や家族との連絡はもちろん、学校・職場・各種活動においても大変重要な通信手段となっています。特に、ビジネスにおいては、世界中の人々とオンラインで通信するために英語による e-mail が必要です。

この授業では、様々な英語表現を学習しながら、実際に e-mail を作成し、カジュアル・フォーマルいずれの場合においても、皆さんが効果的な英文が書け、就職活動や職場においても役に立つ文書作成ができるようになることを目標にします。

学生時代にライティングの技術を習得すれば、社会に出たときの即戦力にもなります。きちんとした英文が書けることが、多くの職種においても求められています。政治・経済がグローバル化した今こそ、基本的な文書処理能力を身につけておきましょう。

[2] 授業の計画

Lesson 1 Introduction

Lesson 2 Hamburger History	Lesson 3 E-mail Challenge
Lesson 4 Rings and Things	Lesson 5 E-mail Challenge
Lesson 6 Bringing up Baby	Lesson 7 E-mail Challenge
Lesson 8 The Bhutanese	Lesson 9 E-mail Challenge
Lesson 10 Into the Wilderness	Lesson 11 E-mail Challenge
Lesson 12 Jade	Lesson 13 E-mail Challenge
Lesson 14 The Mongols	Lesson 15 E-mail Challenge
Lesson 16 Diamonds	Lesson 17 E-mail Challenge
Lesson 18 Gorillas in Our Midst	Lesson 19 E-mail Challenge
Lesson 20 A Father’s Labor	Lesson 21 E-mail Challenge
Lesson 22 Queues	Lesson 23 E-mail Challenge
Lesson 24 Ahead of Fashion	Lesson 25 E-mail Challenge
Lesson 26 Learning to See	Lesson 27 E-mail Challenge
Lesson 28 Smallest	Lesson 29 E-mail Challenge
Lesson 30 Effective E-mail Writing	

[3] 評価の方法

授業中の発表活動(10%)、ﾚﾎﾟｰﾄ(20%)、定期試験（７月下旬と２月上旬）(70%)により総合的に評価します。なお、演習なので出欠席も厳しく評価します。

[4] 教　　材

森田　彰 他著,「*Welcome to BBC on DVD*」(成美堂, 2009)

その他、配布するドキュメンテーション関係教材

マルチメディア演習Ⅱ		担当教員	内藤　徹（ないとう　とおる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

このクラスでは、マルチメディア演習Ⅰで学んだことをさらに発展させていくことを目指します。インターネット、CD、DVD等のメディアを用いて英語をさらに深めていきます。(1)ネットでの英語 (2)映画の中の英語 (3)英文 e-mail (4)Power Point 等を使った英語の発表の基礎を養うことを主たる目的とし、CNNやBBCの視聴によって英語能力の更なる向上を目指します。

マルチメディア演習Ⅰでは主としてインターネット、英語ニュースを理解するという receptive な活動に主眼をおきましたが、マルチメディア演習Ⅱでは主としてコンピュータを使いながら英語で自己発信するという expressive で positive な活動に挑戦していきたいと思います。国際化と情報化は２１世紀を生きる skills の２つのキーワードです。言語とメディアが多様になります。この時代を主体的に有意義に生きるために皆さんの積極的な参加を期待しています。

[2] 授業の計画

Lesson 1 News on line
Lesson 2 Watching BBC and CNN
Lesson 3 Japan on BBC and CNN
Lesson 4 Watching & Studying Movies
Lesson 5 The Birthplace of Jazz
Lesson 6 On the Road
Lesson 7 Your Cigarettes or Your Job
Lesson 8 The Amish Way of Life
Lesson 9 Is Gun Control Possible?
Lesson 10 Making a Living on the Internet
Lesson 11 The Cowboy Tradition
Lesson 12 Cocaine Babies
Lesson 13 The American Way of Shopping
Lesson 14 The Most Important Things in Life
Lesson 15 Volunteer Activity
Lesson 16 Next Stop Space Station
Lesson 17 Jeans Are Forever
Lesson 18 Sue You Later
Lesson 19 Thanksgiving Day
Lesson 20 Parental Abduction
Lesson 21 Shopping for a Christmas Tree
Lesson 22 Seeking a Better Life
Lesson 23 The Era of Designer Vegetables
Lesson 24 Lobsterman－an Island Boy’s Dream
Lesson 25 Let’s write English e-mail(1)
Lesson 26 Let’s write English e-mail(2)
Lesson 27 Let’s write English e-mail(3)
Lesson 28 Effective Speech(1)
Lesson 29 Effective Speech(2)
Lesson 30 Consolidation

[3] 評価の方法

授業中の発表活動(10%)、ﾚﾎﾟｰﾄ(20%)、定期試験（７月下旬と２月上旬）(70%)により総合的に評価します。なお、演習なので出欠席も厳しく評価します。

[4] 教　　材

森田　彰 他著,「*Inside Stories USA*」,（成美堂, 2007）
その他配布する自作教材など

生活会計学Ⅱ		担当教員	大西新吾（おおにししんご）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

「生活会計学演習Ⅰ」、「生活会計学演習Ⅱ」等を通してこれまで学んできたことは、会計学の技術的側面としての初級・中級簿記であった。会計学は技術としての簿記のことである、と理解されることがあるが、会計学においては、技術を支える理論的側面が重要であり、それを理解して初めて技術としての簿記を使いこなすことが可能となる。ここでは、一級会計の教材を用いながら、会計の理論的側面を学んでいく。

[2] 授業の計画

第 1 回　企業会計と会計諸則
第 2 回　一般原則
第 3 回～第 4 回　資産の本質と分類
第 5 回～第 6 回　負債の本質と分類
第 7 回　純資産の本質と分類
第 8 回　中間テストと解説・確認
第 9 回　認識と測定
第 10 回　貸借対照表の本質
第 11 回　損益計算書の本質
第 12 回　キャッシュ・フロー計算書の本質
第 13 回　財務諸表の分析
第 14 回　連結財務諸表
第 15 回　まとめ

[3] 評価の方法

中間テスト（50%）および試験期間中の試験(50%)で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

全国経理学校協会編『完全分類全経簿記 1 級会計』（英光社）ほか、授業中に配布するプリント。

[5] 参考図書

飯野利夫『財務会計論』（同文舘）
染谷恭次郎『現代財務会計』（中央経済社）ほか。

[6] その他

履修にあたっては、「生活会計学Ⅰ」、「生活会計学演習Ⅰ」、「演習Ⅰ」を履修済であることとする。

生活会計学演習Ⅱ		担当教員	大西（おおにし）　新吾（しんご）・松田（まつだ）　平男（ひらお）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

会計学の主な研究対象は企業会計であり、その内容は財務会計・管理会計および会計監査に大別される。財務会計は、企業外部の利害関係者に役立つ会計であり、これを勉強するためには、商業簿記と財務会計学の知識が必要となる。一方、管理会計は、企業内部の主たる利害関係者である経営管理者に役立つ会計であり、これを勉強するためには、工業簿記と原価計算の知識が不可欠となってくる。ここでは、日商簿記検定２級または全経簿記検定１級（工業簿記）の内容としての工業簿記を中心に演習する。

[2] 授業の計画

第 1 回～第 2 回　工業簿記の特色
第 3 回～第 4 回　原価と原価計算
第 5 回～第 6 回　材料費・労務費・経費の計算と記帳
第 7 回～第 8 回　製造間接費の計算と記帳（実際額・予定配賦率による配賦）
第 9 回～第 10 回　部門費の計算（実際額・予定配賦率による配賦）
第 11 回～第 12 回　個別原価計算
第 13 回～第 14 回　単純総合原価計算
第 15 回～第 16 回　組別総合原価計算
第 17 回～第 18 回　等級別総合原価計算
第 19 回～第 20 回　工程別総合原価計算
第 21 回～第 22 回　製品の受払いと販売費および一般管理費
第 23 回～第 24 回　製造原価報告書と計算書類
第 25 回～第 26 回　標準原価計算
第 27 回～第 28 回　直接原価計算
第 29 回～第 30 回　工場会計の独立

[3] 評価の方法

試験期間中の試験（35%）および授業中の 2 回の確認テスト(65%)で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

伊藤　博・小林　哲夫『最新　工業簿記』(実教出版)
岡本　清監修、『段階式新ワーク・ブック　工業簿記 2 級』(税務経理協会)

[5] 参考図書

岡本　清編『新簿記検定　2 級工業簿記』(税務経理協会)
番場嘉一郎・岡本　清編『検定簿記講義 2 級工業簿記』(中央経済社)

[6] その他

電卓を用意すること。なお、履修にあたっては、「生活会計学Ⅰ」、「生活会計学演習Ⅰ」をすでに履修し、十分に理解していることを前提とする。

生活商品学		担当教員	南保　勝（なんぼ　まさる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

何を考えて商品を評価し、いつ、いかなる商品を、いかに、どれだけ、どこから購入するのか。商品を選択し、購買するという行為は、生活者にとって重要なことである。企業は自らの営利を追求するための手段として、様々な広告手法やマーケティングの技法をはじめあらゆる手段を駆使して生活者に向かってくる。もし、あなたが、商品の選択を誤れば、企業に踊らされ、家計を破ることさえあるだろう。また、あなたの商品選択は、企業の売上に影響を及ぼし、環境問題をはじめとする社会の動きに密接に関わる。この授業では、消費者行動論やマーケティング戦略論をベースに、それを生活者の立場から評価し「賢い消費者」になるための基礎となる力を養成する。

[2] 授業の計画

第 1 回　構造変化と消費行動
第 2 回　ブランドとは
第 3 回　環境問題、社会問題と商品
第 4 回　少子高齢化と商品
第 5 回　現代の社会と生活商品学
第 6 回　商品の概念
第 7 回　商品の品質と価格
第 8 回　商品研究のさまざま
第 9 回　標準化と商品の価値
第 10 回　商品の開発
第 11 回　商品のデザインとパッケージ
第 12 回　サービス化とソフト化
第 13 回　商品と安全性
第 14 回　まとめ
第 15 回　ケーススタディ

※以上の内容を講義するが、授業の進行および学生の理解の程度によって、順序を入れ替えたり、内容を若干変更することがあり得る。

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。
基本的には、試験を中心とするが、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点し評価する。ただし、出席が基準に達しない場合、試験の受験を認めない。

[4] 教　　材

見目洋子・神原理著『現代商品論』(白桃書房 2006)

[5] その他

黒板に書いたこと以外も含め、きちんとノートを取ることを強く要求する。

事務管理		担当教員	松田平男（まつだ ひらお）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

ビジネスウァーカーの基本としての事務・文書の管理と実務の習得を目指し、経営情報システム実現のための理論と技術の展開に資する。ヨミ・カキ・ソロバンの基本的文書実践からオフィス・オートメーション時代に対応する近代事務管理論までを射程に入れ、企業で役立つ独自の総合的実学的な事務管理の授業を構築する。

[2] 授業の計画

第 1回～第 2回　1. 経営と事務 (1)事務と情報(a 定義 b 性格 c 情報単位 d 手段性)
(2)事務機能(a 内容と機能 b 能率学 c OA 化 d システム化等)

第 3回～第 4回　2. 事務改善 (1)業務改善と事務改善 (2)デザインアプローチと技法
(3)事務分析(a 組織分析 b 作業分析 c 稼動分析 d 手続分析等)

第 5回～第 6回　3.事務の諸制度 (1)規定管理(a 意義 b 要件 c 特質 d 運用)
(2)稟議制度(a 意義 b 機能 c 運営) (3)会議・報告制度 (a 意義 b 機能 c 特質 d 種類 e 形式 f 原則 g 運営)

第 7回～第 8回　4. 事務管理 (1)事務の進行管理(a 意義 b 機能 c 方法 d 運営)
(2)事務の品質管理(a 意義 b 機能 c 特質 d 方法 e 運営 f 工程･原価管理)

第 9回～第 11 回　5. ビジネス文書と管理 (1)ビジネス文書の基本(a 文書主義の原則 b 内容と分類 c 心得 d 表記法 e 表現法 f 取引文書 g 社交文書 h 社内文書 i その他の文書)

第 12 回　(2)文書・資料のファイリング(a 文書の種類 b 帳票の整理 c 資料の管理等)

第 13 回～第 14 回　6. 環境整備と情報管理 (1)執務環境の整備(a 照明管理 b 色彩管理 c 音響管理 d 空調と空間管理)

第 15 回　(2)OA と情報管理(a OA 登場の背景と段階 b OA 下の情報管理)

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

試験 75 点（持ち込み可）及び復習テスト 25 点（文書事務演習）並びに欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

高原　真編著『事務管理論』(建帛社)、および文書実務演習用プリント配付。

[5] 参考図書

三沢　仁監修『事務・文書管理』(建帛社)

奥喜久男編『最新事務・文書管理』(東京法令) 等多数

[6] その他

上記計画に理論と演練を併行する。例えばビジネス文書、フローチャート、ガントチャート、Z チャート、パート(PERT)、カムアップシステム等の演習を講義と併用する。

演習Ⅰ		担当教員	大西新吾（おおにししんご）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

中級簿記の商業簿記を修得させ、日商3級・全経2級の合格を目標に据える。

[2] 授業の計画

第 1回～第 2回　特殊仕訳帳(現金出納帳等、仕入帳・売上帳、手形記入帳等)の記入
第 3回～第 4回　伝票会計(三伝票制、五伝票制の起票と集計)、独自平均元帳制度
第 5回～第 6回　商品売買における分記法と総記法、五分割、七分割、並びに割引、割戻し、減耗損、評価損等
第 7回～第 8回　特殊売買(委託販売・受託販売・委託買付・受託買付及び試用販売・割賦販売・未着商品・荷為替取引等)
第 9回～第10回　株式会社会計の記帳(設立と株式発行、増資と合併、企業形態と資本)
第11回～第12回　社債の発行・利払・償還、および純損益の処方、法人税等の対処
第13回～第14回　支店会計(本店集中計算制度、未達事項、合併財務諸表等)の演練
第15回～第16回　現金預金取引と銀行勘定調整表および有価証券取引の処理
債権・債務取引、保証債務、未決算勘定、貸倒引当金等への対処
第17回～第18回　手形の振出、裏書、割引、更改、不渡り、荷為替等の仕訳の演練
第19回～第20回　有形固定資産の取得と評価、無形固定資産の取得と評価、減価償却の計算、投資等の種類と評価等の演習
第21回～第22回　繰延資産の意味と種類(開発費、試験研究費、建設利息、創立費等)
第23回～第24回　負債・資本の意味と分類(流動負債、固定負債、引当金、偶発債務
第25回～第26回　資本金、法定準備金、消極性積立金、積極性積立金等)と演練
第27回～第28回　決算整理と財務諸表の作成(棚卸法と誘導法、形式と配列、区分法)
第29回～第30回　その他として財務諸表の静態比率、動態比率、損益分岐点、キャッシュフロー会計、予算統制、原価管理、連結財務諸表および会計監査にもおよびたい。

[3] 評価の方法

授業中の2回の確認テスト（20%）および全経の2級検定試験成績(80%)で評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

全国経理学校協会編『完全分類全経簿記2級商業簿記』(英光社)
その他、授業中に配布するプリント

[5] 参考図書

新井清光『最新商業簿記』(実教出版）ほか。

[6] その他

履修にあたっては、「生活会計学Ⅰ」、「生活会計学演習Ⅰ」をすでに履修し、十分に理解していることを前提とする。

演習Ⅰ		担当教員	北岡一道（きたおかいちどう）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

社会の国際化が進むとともに、英語でのコミュニケーション能力がますます必要となってきている。このような状況を反映して、学生諸君が就職をする際にも、大学外で行われているさまざまな検定試験において一定の資格を取得していることが重視される傾向がみられる。この授業では、このようなニーズに応えるために TOEIC（Test of English for International Communication）に備えた学習をする。TOEIC は TOEFL などと並んで世界的に評価の確立した英語検定試験であるが、実社会で活躍する人達を対象とするテストとしては、前者の方が適していると言われている。そういうわけで、最近は TOEIC を受験する人の数が飛躍的に増えている。

TOEIC の本試験は毎年数回行われるが、みなさんもチャレンジしてもらいたいと考えている。もちろん TOEI は全体的な英語コミュニケーション能力をはかろうとするもので、本授業だけて検定試験において優れた成績をおさめられるような語学力が身につくことはむつかしい。授業の中で習得した学習方法を活かして、平素からたゆまぬ努力をするよう期待する。

[2] 授業の計画

第 1回　オリエンテーションおよびプレースメント・テスト
第 2回～第 6回　学習方法の解説および練習問題
第 7回　中間のまとめ
第 8回～第 14回　学習方法の解説および練習問題
第 15回　前期末まとめ
第 16回～第 21回　学習方法の解説および練習問題
第 22回　中間のまとめ
第 23回～第 29回　学習方法の解説および練習問題
第 30回　年度末まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。次のものを総合して評価する。

・毎回の授業での学習態度(50%)
・小・中間テストの成績(50%)
・TOEIC における成績向上の程度(参考程度)

[4] 教　　材

授業の中で指示する。複数の教材を使用する予定。

演習Ⅱ		担当教員	藤原　正敏（ふじわら　まさとし）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

情報通信技術（ＩＴ）は、そのめざましい発展と普及により、政治、経済、医療、行政、教育、あらゆる分野の研究、市民活動、個人の日常生活等に、活用されている。

これらの分野のＩＴ活用法を詳細に調査すると、情報の処理、情報の蓄積、情報の検索、情報の発信、情報の受信、情報の共有などがうまく機能していることが分る。

本教科では、考古学、市民コミュニティ、電子政府、ふるさと再発見、などについて、その取り組みの現状を調査し、改善策の提案、データベースの構築、データの解析を行う。

多くの教科が、受身的であるが、本教科は、自主的に取り組むことが重要となる。

対象とするテーマについて、自ら積極的に情報活動を行い、グループで議論し、研究活動を進め、その成果を報告書にまとめ、発表する。これらの一連の活動を通して、問題解決のための情報活用能力を習得する。

[2] 授業の計画

第 1回　演習Ⅱの取り組みについて
第 2回　情報活用事例の紹介と文献紹介-1
第 3回　情報活用事例の紹介と文献紹介-2
第 4回　情報活用事例の紹介と文献紹介-3
第 5回　テーマ決定、研究計画の作成
第 6回　研究遂行のための文献調査
第 7回　研究支援ツールの整備
第 8回　中間まとめ、発表
第 9回　研究活動
第10回　研究活動
第11回　研究活動
第12回　中間まとめ、発表
第13回　研究活動
第14回　研究活動
第15回　前期のまとめ
第16回　研究活動
第17回　研究活動
第18回　中間まとめ、発表
第19回　研究活動
第20回　研究活動
第21回　研究活動
第22回　中間まとめ、発表
第23回　研究活動
第24回　研究活動
第25回　中間まとめ、発表
第26回　論文の作成について
第27回　論文（下書き）作成
第28回　論文の作成
第29回　論文の完成
第30回　発表レジメ作成

[3] 評価の方法

研究ノート（日誌)、中間まとめ、報告書、発表態度など総合的に評価する。

[4] 教　　材

必要に応じて、テーマに応じてプリント配布、参考文献を提示する。

[5] 参考図書

研究方法、研究発表、論文作成に関する書籍

演習Ⅱ		担当教員	大西新吾（おおにししんご）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

諸君が生活情報専攻で学んだこと（特に会計学、経営・経済学関連）の総決算として、自ら適切な課題を選び、主体的に課題の解決に取り組むことは意義のあることである。この授業は、このような諸君の主体的な学習を援助することを目的とする。

前期の授業内容は、主として、ビジネス社会の実態・実状を雑誌や新聞等を通して考察し、希望する分野の関連する先行研究について学習し、それを参考にして自分（達）の研究テーマを決め、計画を立てることである。後期には、計画に基づき、本格的に各自のオリジナルな研究に取り組む。授業の外での作業が中心となり、授業では互いにその段階における到達状況を報告し合い、意見を交換する。最後に研究の成果をまとめて報告書を作成する。この授業での学習を卒業研究へとつなげていく。

[2] 授業の計画

第 1回～第 4回　インターネット、雑誌、新聞等を通じて、ビジネス社会の現状を考察し、問題点を探る。

第 5回～第14回　分野ごとに分かれてセミナーを行う。先行研究の事例などを紹介し合い、研究対象や研究方法について学ぶ。この期間のできるだけ早い時期に具体的な研究テーマを絞り込み、研究計画を立てる。

第15回　前期のまとめ

第16回～第22回　各自、またはグループごとに計画に沿って研究を進める。授業の中で研究の進捗状況を報告し、助言し合う。また、中間発表を行う。

第23回～第27回　上記のことを継続するとともに、研究のまとめ方を学ぶ。

第28回～第30回　研究のまとめと報告

[3] 評価の方法

研究に取り組む態度（30%）、研究のできばえ（40%）、貢献度等（30%）を総合して評価する。なお、欠席、遅刻、早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

適宜指示する。

演習Ⅱ		担当教員	田中洋一（たなか よういち）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

グループによるプロジェクト活動を通して、研究法やコミュニケーション方法を学びます。

前期は、「仁愛女子短期大学に進学するか迷っている高校生」に「生活情報専攻で学びたい」と思わせることをテーマとして活動してもらいます。まずは、仁短のこと、仁短のイメージ、生活情報のこと、今どきの高校生のことなどについて、調査研究をします。調査を踏まえて、企画を考え、実際にオープンキャンパスにおいて実行し、アンケート等による評価および自己評価を経て、改善案を探り、報告書にまとめます。ディスカッションや経過を記録するため、SNS、e ポートフォリオ、LMS、ブログ、RSS リーダー、ソーシャルブックマーク等を用いることで、新しい電子メディアの活用法に習熟することを目標としています。

後期は、「まちづくり」、「学習コミュニティ作り」、「障がい者支援」など、より地域と連携したプロジェクト活動をしてもらいます。ICT を活用したコミュニケーションに関するテーマをグループごとに設定します。前期のプロジェクトを参考にして、自分たちで考え、協同し、企画、制作、イベント、発表、報告書作成などを行います。

この授業での学習を卒業研究へとつなげていくことがねらいです。

[2] 授業の計画

【前期】

第 1 回　ガイダンス
第 2 回　グループエンカウンター（自己紹介など）
第 3 回　前期プロジェクトチームを決める
第 4 回　ブレインストーミング・KJ 法
第 5 回　研究計画の作成
第 6 回　文献調査（仁短について）
第 7 回　文献調査（生活情報について）
第 8 回　企画案作成
第 9 回　アンケート調査の計画
第 10 回　アンケート調査の分析
第 11 回　プレゼンテーション資料作成Ⅰ
第 12 回　プレゼンテーション資料作成Ⅱ
第 13 回　プレゼンテーション発表、相互評価
第 14 回　自己評価、企画の改良
第 15 回　オープンキャンパスへの準備、報告書の作成

【後期】

第 16 回　後期プロジェクトチームを決める
第 17 回　テーマを決める
第 18 回　研究計画の作成
第 19 回　調査研究Ⅰ
第 20 回　調査研究Ⅱ
第 21 回　プレゼンテーション資料作成
第 22 回　中間発表、相互評価
第 23 回　研究計画の見直し
第 24 回　プロジェクト活動Ⅰ
第 25 回　プロジェクト活動Ⅱ
第 26 回　研究要旨の作成
第 27 回　プレゼンテーション資料作成
第 28 回　プレゼンテーション発表、相互評価
第 29 回　自己評価、改良
第 30 回　報告書作成

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施しません。
課題、ワークショップでの発言頻度・内容、プレゼンテーションの評価、報告書等を総合的に判断します。基本的にグループ活動を中心としているので、欠席・遅刻・早退、授業態度により減点する場合があります。詳細は、第 1 回目のガイダンスで説明します。

[4] 教　　材

e-Learning 教材、配布資料

[5] 参考図書

藤田哲也『大学基礎講座』(北大路書房 2006)、
必要に応じて指示をします。
その他、研究法、各種電子メディア関連書籍を参考にしてください。

[6] その他

質問等がある場合は、研究室前に掲示してあるオフィスアワー等を利用するか、電子メールで連絡してください。

演習Ⅱ		担当教員	平塚　紘一郎（ひらつか　こういちろう）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

近年の情報技術の発展により、様々な知的創造活動の成果はディジタル情報として多くの人々と容易に共有することが可能となった。このような活動の過程において自ら問題を発見し、それについて議論し解決していく能力を育成することを目的とする。

前期は小グループに分かれて活動テーマを決定した後、テーマに関連する情報の収集と計画を立てる。また必要となる技術の基礎的な知識を修得する。後期は、他のグループや教員らと議論を重ねながら活動を発展させていく。

[2] 授業の計画

（前期）

第 1 回　講義概要の説明
第 2 回　活動テーマの提案
第 3 回　活動テーマの検討
第 4 回　活動テーマとグループの決定
第 5 回　テーマに関する現状、事例の調査
第 6 回　テーマに関する課題の検討
第 7 回　プレゼンテーション方法について
第 8 回　報告会の準備
第 9 回　第 1 回定期報告会
（テーマについての現状、事例、課題）
第 10 回　システムの方針の検討
第 11 回　システムの方針の決定
第 12 回　システム全体の設計
第 13 回　グループ内でのシステム作成部分の分担決定
第 14 回　共同開発の方法、注意点について
第 15 回　ソフトウェアの基礎的な学習(1)

（後期）

第 16 回　ソフトウェアの基礎的な学習(2)
第 17 回　第 2 回定期報告会（システムの設計方針や実現方法など）
第 18 回　ソフトウェアの応用的な学習(1)
第 19 回　ソフトウェアの応用的な学習(2)
第 20 回　テーマに沿った活動(1)
第 21 回　テーマに沿った活動(2)
第 22 回　システムの構築(1)
第 23 回　システムの構築(2)
第 24 回　学習のまとめ
第 25 回　報告書の作成
第 26 回　最終プレゼンテーション準備(1)
第 27 回　最終プレゼンテーション準備(2)
第 28 回　第 3 回定期報告会(1)
（完成したシステムについて）
第 29 回　第 3 回定期報告会(2)
第 30 回　相互評価

[3] 評価の方法

毎回の活動報告およびプレゼンテーション内容、ディスカッションへの参加態度、活動成果内容をもとに総合的に評価する。

[4] 教　　材

必要に応じて資料を配布する。

演習Ⅱ		担当教員	北岡一道（きたおかいちどう）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

専攻において学んだことの総決算として、自ら適切な課題を選び、主体的に課題の解決に取り組むことは意義のあることである。この授業はこのような諸君の主体的な学習を援助することを目的とする。

前期の授業内容は、主として、希望する分野の関連する先行研究について学習し、それを参考にして自分（達）の研究テーマを決め、研究計画を立てることである。後期には、計画に基づき、本各的に各自のオリジナルな研究に取り組む。授業の外での作業が中心となり、授業では互いにその段階における到達状況を報告しあい、意見を交換する。最後に、研究の成果をまとめて報告書を作成する。

[2] 授業の計画

第 1回～第 4回　講義を通して、どのような分野があるのかを知り、自分が研究したいと希望する分野を選ぶ。

第 5回～第14回　分野ごとに分かれてセミナーを行う。担当教員から推薦された先行研究の事例などを紹介しあい、研究対象や研究方法について学ぶ。この期間のできるだけ早い時期に具体的なテーマを絞り込み、研究計画を立てる。

第15回　前期のまとめ

第16回～第22回　各自、またはグループごとに計画に沿って研究を進める。授業の中で研究の進捗状況を報告し、助言し合う。

第23回～第27回　上記のことを継続するとともに、研究のまとめ方を学ぶ。

第28回～第30回　研究のまとめと報告。

[3] 評価の方法

次のものを総合して評価する。

・研究に取り組む態度
・研究のできばえ
・授業への出席状況と貢献度

[4] 教　　材

適宜指示する。

演習Ⅱ		担当教員	内藤　徹（ないとう　とおる）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

専攻した分野において、自ら適切に選択した課題について主体的にその課題の解決に取り組むことは大いに意義があることです。この演習では、このような学生の主体的な学習を援助することを目的とします。

内容は、英語関連の分野（Japan on CNN、英語の映画、英国語学研修［異文化理解、比較文化等］、英語教育論等）の研究・考察です。

前期は、主として研究を希望する分野の関連する専攻研究について学習し、それらを参考にして自分たちの研究テーマを決め、計画を立て、研究に着手します。

後期は、計画に基づき、本格的に各自のオリジナルな研究をすすめていきます。授業外での作業も重要なものとなり、授業中にはお互いにその段階における到達状況を報告し、意見を交換します。最後に、研究の成果をまとめて報告書を作成します。

発表は英文でのパワーポイントを用いて行います。

[2] 授業の計画

第 1 回　演習内容と計画の立て方
第 2 回　先行研究の調査
第 3 回　研究分野の調査
第 4 回　研究分野の決定
第 5 回　研究分野と役割分担
第 6 回　データの収集について
第 7 回　データ収集開始
第 8 回　データ収集と研究
第 9 回　データ分析と研究の進め方
第 10 回　データ分析と研究
第 11 回　研究の深化
第 12 回　研究と仮説
第 13 回　研究方法の確認と研究継続
第 14 回　データ処理と分析
第 15 回　分析処理
第 16 回　分析解析
第 17 回　研究の検証(1)
第 18 回　研究の検証(2)
第 19 回　まとめ作業
第 20 回　まとめと考察
第 21 回　考察の検証
第 22 回　要旨の構想
第 23 回　要旨内容確認
第 24 回　英文要旨下書き
第 25 回　英文要旨仕上げ
第 26 回　英文レポート構想
第 27 回　英文レポート下書きと仕上げ
第 28 回　パワーポイントの作成
第 29 回　パワーポイント確認
第 30 回　発表準備と確認

[3] 評価の方法

発表内容、研究報告書、参加意欲・態度、授業への出席、貢献度などを総合的に評価します。

[4] 教　　材

参考図書や文献などを適宜指示します。

演習Ⅱ		担当教員	井上清一（いのうえ せいいち）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

生活情報の分野において、与えられた課題について自ら考え問題を解決する能力の育成を目的とした演習を行う。

授業の内容としては、前期は小グループに分かれて希望する課題を選びその課題に関連した研究について調査する。調査をもとに内容を絞り込んでグループごとに研究テーマを決め、研究に必要な情報収集を行うとともに研究計画を立てる。後期になると研究計画に基づいて研究の成果を報告する中間発表を数回おこない最後にまとめの発表会をおこなう。これらの研究テーマに沿った演習や発表会を通じて資料作成及びプレゼンテーションの基本を身につける。加えて研究の方法や成果の発表方法および報告書作成の手順を体系的に理解し、卒業研究へとつなげていくことがねらいである。

[2] 授業の計画

第　1回～第5回　生活情報分野の論文や報道記事の輪読を通して、興味を持った分野から研究テーマを決定する。

第　6回～第10回　テーマごとに分かれてどのようなことが研究されているかを各自が調査し事例をもとに研究内容を決定する。

第11回～第15回　研究に必要な情報処理の知識について学習し、後期の研究計画を作成する。

第16回～第25回　計画にしたがって研究をすすめ研究の報告会を通してお互いに助言し合うことで研究内容の充実させるよう努力する。

第26回～第28回　研究のまとめと報告書の作成

第29回～第30回　研究発表会の実施と相互評価

[3] 評価の方法

以下の項目をもとに総合的に評価する。

・授業態度

・レポート及び発表内容

・欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

参考図書や文献を適宜指示する。

住生活論		担当教員	内山秀樹（うちやまひでき）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

住まいは、人間にとって最も基本的な生活空間であり、一生のうち最も多くの時間をここで過ごしている。住まいの良し悪しは、心身の健康はもとより、子供の成長発達や家族生活の安定、高齢者の自立など、安心・安全な生活に大きく影響する。

この講義で学習目標は以下の通りである。

①「眠る」、「食べる」、「着る」、「入浴･排泄」などの生活行為そのものを科学的に理解する。

②上記の生活行為を豊かにするために求められるすまいのあり方について理解する。

なお、この授業はすまいのプランニングやインテリア関連分野を目指す方にとっては導入部の基本的なものであるため、必修の授業である。

[2] 授業の計画

第 1回　授業ガイダンス：住生活論とは？
第 2回　人と生活(レポート1：わが家の間取りとわが家のライフスタイル)
第 3回　眠りの空間(1) 眠りの生理と快適な眠りの環境
第 4回　〃　(2) 就寝様式の変遷とその空間計画
第 5回　食事の空間(1) 食事様式と食事環境の変遷
第 6回　〃　(2) 食事空間、調理空間の計画
第 7回　着る 快適な着衣環境と衣服の収納計画(レポート2)
第 8回　水回り空間(1) 入浴排泄の様式の変遷
第 9回　〃　(2) 入浴排泄空間の計画
第10回　つきあい空間(1) つきあい空間の歴史
第11回　〃　(2) つきあい空間の計画
第12回　子育てと住まい(1) 子どもの発達とすまい
第13回　〃　(2) 子ども部屋の計画(レポート3)
第14回　お年寄りが暮らしやすい住まい
第15回　講義のまとめ：人と環境にやさしいすまい手になろう

[3] 評価の方法

レポートと試験期間中の試験とで評価する。

試験60%、レポート30%、ふりかえりシート(受講姿勢)10%のウェイトで評価。

欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　材

林　知子他『住まい方から住空間をデザインする』(彰国社2000)

[5] 参考図書

後藤　久監修『住居学入門』(実教出版社1999)、住田昌二編『現代の住まい　基礎住居学』(光生館 1986)、岸本幸臣『図説テキスト　住居学』(彰国社 1997)、小澤紀美子編『豊かな住生活を考える－住居学』(彰国社2002)

[6] その他

私語が目立つ場合は座席指定とする。机上には授業に関係ないかばん等を置くことを禁ずる。

生活経営学		担当教員	高田洋子（たかだようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

私たちは、現在、自分以外の人が作ったモノ、あるいは人が提供してくれるサービスを消費することなくして生活することはできない。よりよい消費は生活の質を確保する１つの手段である。しかしながら、消費に関する問題は後をたたない。現代の消費の問題を把握するとともに、具体的な消費の問題を考えることを通じて、消費のトラブルの未然防止の力をつけていくことを目的とする。

[2] 授業の計画

第　1回　登録
第　2回　消費者とは何か、消費者問題とは何か、近年の消費者問題
第　3回　契約って何？、契約書を読んでみよう、書いてみよう
第　4回　特殊販売と問題商法、悪徳商法のいろいろⅠ
第　5回　悪徳商法のいろいろⅡ、クーリングオフを学ぶ
第　6回　日本の契約における課題、消費者契約法
第　7回　契約の解約をしてみよう（クーリングオフ、消費者契約法）
第　8回　欠陥商品とは
第　9回　ＰＬ法
第10回　住宅の欠陥
第11回　消費者行政
第12回　消費者信用１（販売信用）
第13回　消費者信用２（消費者金融）
第14回　クレジットカードと金銭管理
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

ミニテスト（授業中に行う）、レポートおよび毎回の提出物によって評価する。

[4] 教　　材

大藪千穂「お金と暮らしの生活術」（昭和堂，2006年）

[5] 参考図書

授業の中で紹介する。

食品加工実習		担当教員	三谷勝己（みたにかつみ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	1単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

食品加工学で学んだ内容をより深く総合的に理解するためには、自らの手でいろいろな加工食品を製造することが大切である。しかし、食品加工技術の進歩や核家族化などの社会的変化により、昔から家庭で行われてきた食品加工を直接目にする機会も少なくなってきている。ここでは季節にあった材料を用いて、いろいろな加工食品を家庭で行う規模に工夫して製造し、食品加工学の理解度を深めることを目的としている。

[2] 授業の計画

（季節にあった材料を使用するので順不同で行う）

第 1回　1. 農産加工品の製造：うどんの製造
第 2回　中華めんの製造
第 3回　豆腐の製造
第 4回　みそ、甘酒の製造
第 5回　漬物類の製造(白菜漬、たくあん漬など)
第 6回　トマトケチャップの製造
第 7回　ジャム類の製造(イチゴジャム、リンゴジャムなど)
第 8回　コンニャクの製造
第 9回　みかんの缶詰の製造
第10回　ソースの製造
第11回　2. 畜産加工品の製造：酸乳飲料の製造
第12回　チーズ、バターの製造、牛乳の品質検査
第13回　肉加工品の製造
第14回　3. 水産加工品の製造
第15回　4. 菓子類の製造：キャラメルの製造

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を実施する。試験 50%、レポート 30%、実習技術試験 20%の割合で評価する。出席して積極的に実習することに意義があるので、学習態度や欠席などを採点の対象とする。

[4] 教　　材

必要に応じてプリントを配付する。

[5] 参考図書

相沢孝亮編『食品加工実習』(地人書館 1975年)
峰下　雄他『てがるにできる加工食品』(建帛社 1983年)

[6] その他

この授業は栄養指導実習とペアなので、コースをＡ、Ｂに分けそれぞれ隔週実習となり通年で1単位である。

臨床栄養学		担当教員	清水　瑠美子（しみず　るみこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

不適切な食事摂取に起因する疾病をはじめ、病気の予防と病気の重症化を防ぐためには、食事療法は重要です。病気の要因及び病気になって起こる身体の変化、異常を正確に理解することで、適切な食事の調整ができる力を養います。また、将来管理栄養士として栄養管理ができるために小児期、高齢期も含んだ栄養管理に必要な基礎的な知識と応用力も養います。

[2] 授業の計画

第 1 回　臨床栄養学の意義と目的、今後の課題
第 2 回　内分泌疾患
第 3 回　糖尿病
第 4 回　循環器疾患
第 5 回　消化器疾患（胃・腸）
第 6 回　消化器疾患（肝・胆・膵）
第 7 回　呼吸器疾患
第 8 回　感染症
第 9 回　血液疾患（貧血）免疫・アレルギー
第 10 回　骨（骨粗鬆症）・歯
第 11 回　栄養欠陥（栄養失調症・欠乏症・摂食障害）
第 12 回　外科（術前術後）栄養法
第 13 回　小児疾患（アレルギー・先天性代謝異常症他）
第 14 回　高齢者（高齢者の生理と病態）栄養評価とは
第 15 回　まとめと復讐

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験（60%）、レポート（40%）、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

佐藤和人、本間健、小松龍史編『臨床栄養学』（医歯薬出版）

[5] 参考図書

必要に応じて講義の中で紹介する。

臨床栄養学各論		担当教員	清水　瑠美子（しみず　るみこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

個人を対象にして、疾病の予防及び治療に効果的な栄養管理（nutritional care）を行うための、栄養評価法、栄養補給法、疾患別食事療法の実際を理解する。

効果的な健康、栄養教育により、栄養状態の改善、維持、継続が可能である。栄養士業務により生活習慣を改善し患者の QOL を向上できることを理解し、この為の知識と技術を身につける。

[2] 授業の計画

第 1 回　栄養評価法　栄養補給法　栄養指導
第 2 回　「内分泌・代謝疾患」肥満、るいそう、痛風、甲状腺機能亢進症の食事療法について
第 3 回　糖尿病 1　食事療法の目的
第 4 回　糖尿病 2　食事療法の実際
第 5 回　「循環器疾患」うっ血性心不全、高血圧　動脈硬化　高脂血症 1 食事療法の目的
第 6 回　「循環器疾患」うっ血性心不全、高血圧　動脈硬化　高脂血症 2 食事療法の実際
第 7 回　「腎疾患」腎炎、ネフローゼ、腎不全　食事療法の目的と実際
第 8 回　「消化器疾患」胃・十二指腸潰瘍　腸疾患　炎症性腸疾患　食事療法の目的と実際
第 9 回　「消化器疾患」肝臓、膵臓、胆道疾患　食事療法の目的と実際
第 10 回　「妊娠時、授乳期」の栄養管理　妊娠高血圧症状群　食事療法の目的と実際
第 11 回　「感染症」「呼吸器疾患」　食事療法の目的と実際
第 12 回　「血液疾患」「アレルギー疾患」　食事療法の目的と実際
第 13 回　「小児疾患」小児の栄養　先天性代謝異常症　食事療法の目的と実際
第 14 回　「高齢者の栄養管理」PEM　摂食嚥下障害
第 15 回　「術前・術後」の栄養管理　「特殊栄養法」経腸・静脈栄養
チーム医療と栄養士の役割

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験 100 点。欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

佐藤和人、本間健、小松龍史編『臨床栄養学　第 4 版』（医歯薬出版）

[5] 参考図書

『腎臓病食品交換表』（医歯薬出版）
糖尿病学会編『糖尿病食品交換表』
赤岡家雄他『目で見る臨床栄養学』（医歯薬出版）

臨床栄養学実習		担当教員	桑野洋子（くわの ようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

疾病発症のメカニズムが解明されるにつれ、長い食生活が危険因子になりうることがある。栄養素摂取の過剰・偏重・欠乏、栄養素の代謝異常、不合理な食生活など、栄養上の欠陥がもたらす疾患が該当する。そこで栄養状態の把握と食事療法の意義を理解し、実践できる力を養うことをねらいとする。

[2] 授業の計画

第　1回　臨床栄養管理について
第　2回　流動食の献立展開
第　3回　軟菜食（三分粥食・五分粥食・七分粥食・全粥食）
第　4回　「糖尿病食事療法のための食品交換表」による献立作成
第　5回　エネルギーコントロール食
第　6回　「腎臓病食品交換表」による献立作成
第　7回　たんぱく質コントロール食
第　8回　栄養アセスメント　24時間思い出し法による評価
第　9回　高脂血症食
第10回　肝臓病食
第11回　心臓病食
第12回　貧血食
第13回　自主献立による実習　「糖尿病食事療法のための食品交換表」による献立作成
第14回　自主献立による実習　栄養計算、献立調整
第15回　自主献立による実習　調理実習
（第13回～第15回はグループ別に実習し、発表する）

[3] 評価の方法

レポートと試験期間中の試験とで評価する。
試験（50%）、レポート等（30%）実習への取り組み及び発表内容を20%の割合で評価する。
欠席　遅刻　早退および授業進行の妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

『臨床調理』（医歯薬出版）

[5] 参考図書

『月刊 臨床栄養』（医歯薬出版）
『ビジュアル臨床栄養百科』（小学館）
中村丁次編『栄養食事療法必携』（医歯薬出版）

調理学実習Ⅱ		担当教員	岸（きし） 松（まつ） 静（しず） 代（よ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

「調理学実習Ⅰ」が基礎調理であるのに対してこの授業は応用調理である。日本料理、中国料理、西洋料理のより高度な技術を必要とするものや、季節性・行事などを考慮したものを実習する。また、郷土料理や世界の料理なども取り入れ、年代、民族などに適応できる能力を養うことに重点をおく。

[2] 授業の計画

第 1回　講義（調理の特徴と献立構成）、お菓子作り
第 2回　日本料理の応用（季節の献立・春）
第 3回　日本料理の応用（すし、上新粉の調理）
第 4回　西洋料理の応用（豚肉ソテー、ババロア）
第 5回　日本料理の応用（行事食・端午の節句）
第 6回　中国料理の応用（季節の献立・春）
第 7回　西洋料理の応用（鶏の解体、マリネ）
第 8回　日本料理の応用（松花堂弁当）
第 9回　西洋料理の応用（ハヤシライス、マドレーヌ）
第10回　西洋料理の応用（フルコース作製、セッティング）
第11回　西洋料理の応用（フルコース、テーブルマナー）
第12回　日本料理の応用（福井の伝承料理）
第13回　中国料理の応用（季節の献立・夏）
第14回　日本料理の応用（季節の献立・夏）
第15回　指定材料を用いた自主献立
第16回　中国料理の応用（季節の献立・秋）
第17回　西洋料理の応用（クリームコロッケ、りんごのパイ）
第18回　日本料理の応用（季節の献立・秋）
第19回　世界の料理（韓国・ベトナム・インド）
第20回　新しい調理法（真空調理）
第21回　世界の料理（イタリア・スペイン・ドイツ）
第22回　中国料理の応用（季節の献立・秋）
第23回　食卓の演出（年中行事とテーブルセッティング）
第24回　日本料理の応用（季節の献立・冬）
第25回　日本料理の応用（行事食・正月）
第26回　西洋料理の応用（行事食・クリスマス）
第27回　中国料理の応用（季節の献立・冬）
第28回　日本料理の応用（行事食・ひな祭り）
第29回　西洋料理の応用（お菓子バイキング）
第30回　ある材料を使用する応用献立

[3] **評価の方法** 試験期間中に試験を実施する。さらに授業時間の自主献立作成及び実習ノートとで評価する。実習ノートは指定日に 5 回提出すること。 試験 50 点、自主献立 30 点　実習ノート 20 点とする。 また、欠席、遅刻、早退は減点の対象とする。
[4] **教　　材** 「調理学実習Ｉ」に準ずる。
[5] **参考図書** 「調理学実習Ｉ」に準ずる。

公衆衛生学		担当教員	出口洋二（でぐちようじ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	必修

[1] 授業のねらい

人々の疾病を予防し、健康の保持・増進を図るためには、医療技術の開発のみならず、地域住民の健康教育と健康管理が組織化された地域社会の努力を通じて進められてこそ、はじめて達成可能であり、栄養士や調理師は重要な責務を担っていることを認識させ、現在行われている公衆衛生対策の内容と課題について理解を深める。

[2] 授業の計画

第 1 回　公衆衛生活動の特徴と進め方
第 2 回　公衆衛生学の歴史と予防医学の考え方
第 3 回　衛生行政機構と保健医療制度
第 4 回～第 6 回　保健統計と集団の健康指標
第 7 回～第 8 回　疫学の考え方
第 9 回～第 10 回　母子保健
第 11 回　学校保健
第 12 回　産業保健
第 13 回　成人・老人保健
第 14 回～第 15 回　環境保健

[3] 評価の方法

試験成績×課題提出率
授業内容のキーワードを簡潔に文章で説明する課題を 7 回提出する

[4] 教　　材

久道茂・鈴木庄亮監修『シンプル衛生公衆衛生学』（南江堂 2011 年）

[5] 参考図書

厚生統計協会編『国民衛生の動向 2010/2011 年版』
同上『国民福祉の動向　2010/2011 年版』
同上『保険と年金の動向　2010/2011 年版』
厚生労働省編『国民健康・栄養の現状』第一出版 2010 年
環境省編『平成 22 年版環境白書』日経印刷 2010 年
沖藤典子著『介護保険は老いを守るか』岩波新書 2010 年
東京商工会議所編著『eco 検定公式テキスト改訂 2 版』日本能率協会 2010 年
近藤克則著『健康格差社会』医学書院 2005 年
津金昌一郎著『がんになる人ならない人』講談社ブルーバックス 2004 年）
宮里勝政著『タバコはなぜやめられないか』岩波新書 1993 年
中村好一著『基礎から学ぶ楽しい疫学』医学書院 2002 年

公衆衛生学各論		担当教員	出口洋二（でぐちようじ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次後期	選択

[1] 授業のねらい

前期の「公衆衛生学」の各論として物理的・化学的・生物的・人工的・社会的環境要因と保健対策について、自助努力のみならず他人と相互協力することで、より効果的に理解を深められることを認識させ、学習内容を発表・まとめることにより栄養士として必要な表現力を高めることを目標とする。

[2] 授業の計画

第 1 回　学生が関心をもっていて、さらに深く学びたいと思う環境要因を全員で列挙し、その中から 9 つ選び班を編成する。

第 2 回～第 10 回　選定した環境要因のもたらす健康影響の現状と課題および栄養士としてできることは何かについて班としての考えを各班 3 回に分けて発表する。

調査した内容をまとめてパワーポイントを使って説明する。（毎回 3 班、各班 20 分）

教官のアドバイスを受ける（10 分）。

他班から発表に対する評価点と質問（質問者の記名付き）を受けつけ、次回発表日の前日までに、質問に対する回答を返答欄に記載して教員に提出し、発表評価点・質問評価点のチェックを受けた後、質問者へ返却する。

第 11 回　レポート作成上の注意点について説明を受けたのちレポート作成開始
（各班 A4 版　12 ページ程度、MS Word 使用）

第 12 回　レポートの作成→教員のチェックを受ける

第 13 回　レポートの修正

第 14 回　レポートの印刷と配布

第 15 回　他班のレポートの達成度を全員個別に評価

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

総合評価　＝　{班別得点×班への個人別寄与率＋質問評価点（40 点)}×出席率

班別得点＝　発表評価点（30 点)＋レポート評価点（30 点）

[4] 教材

久道茂・鈴木庄亮監修『シンプル衛生公衆衛生学』（南江堂 2011 年）

[5] 参考図書

厚生統計協会編『国民衛生の動向 2011/2012 年版』

吉田たかよし著『「分かりやすい説明」の技術』（講談社ブルーバックス 2005）

藤沢晃治著『「分かりやすい説明」の技術』（講談社ブルーバックス 2002）

同上　　『「分かりやすい文章」の技術』（講談社ブルーバックス 2004）

同上　　『「分かりやすい教え方」の技術』（講談社ブルーバックス 2008）

小笠原喜康著『大学生のためのレポート・論文術』（講談社現代新書 2002）

栄養指導論Ⅱ		担当教員	牧（まき）　野（の）　みゆき
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

栄養指導の対象は、特性を持ったある集団であったり、個性豊かな個人である。栄養指導論Ⅱではそれぞれに見合った栄養教育や個人指導のあり方を検討する。グループごとに栄養指導の様々な課題を設定し、パネルディスカッション、ワークショップ、ロールプレーイング等を通して、対象者と指導者の役割や問題点を認識することをねらいとしている。

[2] 授業の計画

第　1 回　年代別栄養教育・栄養指導：妊娠・授乳期
第　2 回　〃　：乳児期
第　3 回　〃　：幼児期
第　4 回　〃　：学童期
第　5 回　〃　：思春期
第　6 回　〃　：成人期
第　7 回　〃　：壮年期
第　8 回　〃　：老年期
第　9 回　臨床栄養教育・栄養指導：循環器疾患
第 10 回　〃　：栄養代謝疾患
第 11 回　〃　：腎疾患
第 12 回　〃　：消化器疾患
第 13 回　〃　：血液疾患
第 14 回　〃　：小児疾患、心身症、アレルギー疾患
第 15 回　〃　：在宅患者、障害者
第 16 回　活動分野別栄養教育・栄養指導：病院
第 17 回　〃　：学校、産業給食
第 18 回　〃　：社会福祉施設
第 19 回　〃　：保健センター
第 20 回　〃　：老人保健施設
第 21 回～第 30 回　栄養教育・栄養指導の実際　グループ別に設定した課題演習

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験 70%、出席数 10%、レポート 10%、授業態度及び発表内容 10%の割合で評価する。

[4] 教　　材

笹谷美恵子他『栄養教育・指導実習入門』（同文書院）
最新情報は必要に応じて資料を配布する。
グループ別演習においては、学生が作成する指導用媒体を用いる。

[5] 参考図書

日本栄養士会『栄養日本』『健康増進のしおり』　その他

栄養指導実習		担当教員	牧（まき）　野（の）　みゆき
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

栄養指導実習はグループ編成により役割を分担して行う。校内集団給食実習を通して、食教育のあり方を考察し、栄養指導の具体的方法を学習する。

内容は(1)給食運営における基本献立の実習と応用。(2)栄養指導のための資料収集。(3)食教育媒体作成、アンケート調査等により実践力を養う。

[2] 授業の計画

第　1回　栄養指導実習の要領説明（校内集団給食実習の目的と栄養指導実習）
給食実習班(A)と栄養指導班(B)に分けて交互に通年にわたって実習

区分	給食班（A）	指導班（B）
第　2回～第　3回	給食管理（plan･do･see）	栄養指導のための情報収集
第　4回～第　5回	厨房機器説明　衛生管理	大量調理理論
第　6回～第　7回	校内給食の栄養管理システム	昼食状況のアンケート実施
第　8回～第　9回	帳票類記入　給食費管理	指示献立より展開食の作成
第10回～第11回	テーマによる献立作成	調査データの処理と検定
第12回～第13回	予定献立の試作・検討	〃
第14回～第15回	指示献立の実習	〃
第16回～第17回	課題献立1の実習	媒体作成Ⅰ（食教育新聞）
第18回～第19回	課題献立2の実習	〃　Ⅱ（卓上メモ）
第20回～第21回	課題献立3の実習	媒体の発表・展示
第22回～第23回	課題献立4の実習	〃
第24回～第25回	バイキング給食メニュー作成	給食のアンケートまとめ
第26回～第27回	糖尿病食のバイキング式給食	学内給食の評価
第28回～第29回	実習記録ノート提出　反省	提出課題のまとめ
第30回　まとめ		

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。

試験60%、実習記録ノート20%、実習への取り組み状況20%の割合で評価する。
出席して実習することに意義があるので、欠席を減点の対象とする。

[4] 教　　材

笹谷美恵子他『栄養教育・指導実習入門』（同文書院）
他に担当者が作成する資料を用いる。

[5] 参考図書

殿塚婦美子他『改訂 大量調理』（学建書院）

[6] その他

給食班(A)では、実習衣、帽子、マスクを着用し、衛生面に留意すること。

給食管理実習		担当教員	牧野（まきの）　みゆき・桑野（くわの）　洋子（ようこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

栄養士養成施設は法令等に基づき、学外特定給食施設での給食管理実習が必修となっている。本学においては、病院、福祉施設、学校給食施設より、学生が卒業後の進路を踏まえ、希望する施設で 90 時間以上の栄養士実務教育を受ける。経験豊かな管理栄養士を中心に、施設スタッフ全体での指導を受け、各施設の特色ある業務を理解し、給食管理に必要な知識や実践方法についての技能を習得する。学外実習をとおして勤労の精神、責任感を体得する人格陶冶を望む。

[2] 授業の計画

第　1 回　　オリエンテーション:学外実習の説明・実習先の決定
第　2 回　　実習施設訪問：実習挨拶・指導者との打ち合わせ
第　3 回～第　8 回　　学外実習：主に厨房内業務
第　9 回　　実習施設の管理栄養士による講義
　　演題「栄養士の任務と実習心得」
第 10 回　　実習先の決定・実習ノートの記録方法・研究課題の準備
第 11 回　　実習施設訪問：実習挨拶・指導者との打ち合わせ
第 12 回～第 29 回　学外実習：栄養士業務全般
第 30 回　　総まとめ（実習ノートの提出・研究課題の報告）

[3] 評価の方法

試験期間中の試験は実施しない。

実習前後の課題（学外実習ノート、研究課題など)、全授業の出席、実習先指導者の評価などを総合評価する。

[4] 教　　材

担当者作成『校外実習の手引』、『給食管理実習ノート』

[5] 参考図書

井上明美他編『給食経営・管理実習』

解剖生理学		担当教員	齋藤正一（さいとう まさかず）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

人体のなりたち（構造：解剖学）とはたらき（機能：生理学）を話します。ひとりの人間は生物としては一個体ですが、そのからだを支える骨格、それを動かす筋肉、さらにそれを統合する神経、というような機能的なまとまり（「系統」といいます）にわけて見ることができます。このまとまりは、さらに骨、筋肉、内臓といった「器官」から成り立っていて、顕微鏡を使うと、「組織」と呼ばれる構造があり、「細胞」と呼ばれる生命の基本単位がおのおの独立に活動しつつ、個体の生命を担っている様子がわかります。こうして「人体の構造と機能」に関する知識が、「健康な生活を送り、どうすれば病気を予防・治療できるか」を考えるときに有力な手がかりになるのです。ただ、その量は膨大で、解明されていないことも多く、すべてを語りつくすことはできません。受講者が将来、健康・病気と栄養との関係をさらに深く学ぼうとするときに役立つような知識を身につけてもらう、というのがこの授業のねらいです。

[2] 授業の計画

第 1 回　生体のなりたち：細胞・組織・器官・系統
第 2 回　遺伝子と細胞・組織
第 3 回　骨格系と運動器系
第 4 回　消化器系
第 5 回　呼吸器系
第 6 回　循環系
第 7 回　血液と体液
第 8 回　免疫系
第 9 回　エネルギー代謝と体温調節
第 10 回　内分泌系
第 11 回　神経系
第 12 回　感覚器と皮膚
第 13 回　泌尿器系
第 14 回　生殖器系
第 15 回　まとめ

[3] 評価の方法

講義終了後、試験期間中に筆記試験を行い、その成績による。基本的な知識が修得できているかを確認する。正当な理由なく遅刻・早退が度重なる場合は、減点の対象にします。

[4] 教　　材

河田・三木（編）「栄養科学ｼﾘｰｽﾞ NEXT 解剖生理学」第２版（講談社 2007）

[5] 参考図書

必要に応じ、そのつど講義の中で紹介する。

[6] その他

毎回、数枚のプリントを配布し、スライドを併用して講義する。前に配布したプリントを後から参照することもあるので、既に配布した分も含めて毎回持参すること。欠席等のために貰いそびれた人にはバックナンバーを準備するので、申し出て補っておくように。ファイルフォルダー（A4 サイズ）を用意しておくと便利でしょう。

解剖生理学実験		担当教員	池田 涼子（いけだ りょうこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実験	1単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

栄養学は食物成分と生体との相互作用を理解し、人間の健康を保持増進することを目的としており、その基礎的科目としてヒトのからだを知るうえで解剖生理学は重要である。本実験では生体の形態と機能を把握するために動物を用いた栄養実験と解剖の他に、栄養素や臨床的な生体成分に関する分析試験を行う。また、本授業は講義で学習した知識をより深く確かなものとするために、生化学実験の内容とも関連させながらおこなう予定である。

[2] 授業の計画

第 1回　ガイダンス、組織の観察(1)
第 2回　組織の観察(2)胃・十二指腸
第 3回　組織の観察(3)顎下腺・膵臓
第 4回　組織の観察(4)肝臓、腎臓
第 5回　組織の観察(5)卵巣、精巣
第 6回　血球数の測定
第 7回　凝固系と線溶系
第 8回　栄養状態の測定
第 9回　呼吸器系と循環系
第10回　尿中成分の測定
第11回　唾液腺とアミラーゼ活性
第12回　唾液アミラーゼ活性の個人差
第13回　摂食リズムと血糖値
第14回　耐糖能試験
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

レポート30%・検鏡スケッチ15%、試験期間中の試験55%とする。
欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。その他当番活動も含めて総合評価する。

[4] 教　　材

特になし

[5] 参考図書

相磯貞和他訳『ネッター解剖生理学アトラス』(南江堂 2006)
谷　政八 他 『生理・生化学実験(第三版)』(地人書館 2003)
※「生化学実験」から引き続き使用する。

[6] その他

実験室内では白衣および上履き着用など注意事項を必ず守ること。
実験は2～3名のグループでおこなう。
関数電卓を用意すること。

生化学Ⅰ		担当教員	種村安子（たねむらやすこ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

生化学は、普遍的な生命現象のしくみを化学的な物質の変化として捉え、理解する学問である。生化学Ⅰでは、生体成分の基本的な構造と性質を学び、その機能を理解する。また、代謝の基本としての酵素反応機構を理解することによって、生体成分の代謝について理解を深める。

[2] 授業の計画

第 1回　人体の構造（1）細胞の構造と機能、(2)組織と器官
第 2回　糖質の化学（1）単糖類・少糖類・多糖類の構造と機能、
第 3回　〃　（2）血糖の調節
第 4回　脂質の化学（1）脂質の分類と性質、(2)リポたんぱく質の種類と機能
第 5回　〃　（3）イコサノイドの機能、(4)脂肪細胞の役割
第 6回　タンパク質の化学(1)たんぱく質の構造、(2)アミノ酸の性質
第 7回　〃　（3）生体を構成するたんぱく質の機能
第 8回　ヌクレオチドと核酸(1)構造と機能
第 9回　酵素の性質と働き(1)酵素とは、酵素の分類、酵素反応
第10回　〃　(2)酵素活性の調節
第11回　ビタミンと補酵素
第12回　ミネラル　(1)ナトリウム・カリウム　(2) 微量ミネラル
第13回　水（1）水の特性、(2) 水の出納
第14回　遺伝情報の発現と栄養(1)遺伝子と染色体、(2)遺伝情報はたんぱく質情報
第15回　〃　(3)病気と遺伝子

[3] 評価の方法

試験期間中の試験（70%）、小テスト（30%）
欠席、遅刻、早退及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　材

田村　明他『イラスト生化学入門』(東京教学社)

[5] 参考図書

林典夫・廣野治子『シンプル生化学』(南江堂)
ヴォート基礎生化学第3版（東京化学同人）

生化学Ⅱ		担当教員	谷（たに）　政八（まさはち）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

生化学Ⅰの授業内容をさらに深め、内容をあまり欲張らずに基本的なことや必要な事項は親しみをもって学習できるようにする。

具体的には、生体成分が体内に摂取された後どの様な経路をへてからだの維持に役立つかを学ぶ。特に物質代償、エネルギー代謝の機構・調節相互関係などを生体の側に立って理解する。

[2] 授業の計画

第 1回　生体内での食物のゆくえ
第 2回　生体内におけるタンパク質、糖質、脂質の相互交換
第 3回　エネルギーはどのように産生され利用されているのか
第 4回　タンパク質は生体内でどのように代謝されているのか
第 5回　糖質は生体内でどのように代謝されているのか
第 6回　脂質は生体内でどのように代謝されているのか
第 7回　物質代謝の調節は何か
第 8回　低分子・高分子化合物の代謝調節
第 9回　恒常性と調節
第10回　血液はどのような働きをするのか
第11回　血液の組成、血液の働きと一般的性質
第12回　体液の pH 恒常性の仕組み
第13回　尿とはどのようなものか
第14回　尿とはどのようにして作られるのか
第15回　免疫とはどのようなことか

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。試験 80%、レポート 20%、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

また、栄養・食品・からだに関する単庫本を読みレポートを課して全体を加味して評価する。

[4] 教　　材

資料等はプリントして配付する。

[5] 参考図書

「生化学Ⅰ」に記載

生化学実験		担当教員	鳴瀬（なるせ）　みどり
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
実験	1単位	2年次前期	選択

[1] 授業のねらい

生化学実験の目的とは、学生実験の範囲内で学習している種々の教科の知見をより一層深く理解されることと、さらに事実の解明を図ることにある。すなわち生化学は、栄養素の代謝を主とし、さまざまの生命現象を分子レベルで検索して、疾病との因果関係、あるいは作用機作を究明することにある。そこで生化学実験では、生体成分を試験材料に用いることがほとんどである。したがって、他の化学実験と同様、実験を進めるためには基礎的な知識が必要であるとともに、その過程で慎重かつ細やかな観察力が不可欠である。

[2] 授業の計画

第 1回　糖質の定性反応①
第 2回　糖質の定性反応②（結果のまとめと発表）
第 3回　タンパク質の定性反応①
第 4回　タンパク質の定性反応②（結果のまとめと発表）
第 5回　タンパク質の性質（熱変性、等電点沈殿）
第 6回　アルブミン・グロブリンの分離・定量①（Lowry 法、検量線の作成）
第 7回　アルブミン・グロブリンの分離・定量②（試料測定）
第 8回　アルブミン・グロブリンの分離・定量③（まとめ）
第 9回　糖質の消化実験
第10回　脂質の消化実験
第11回　タンパク質の消化実験
第12回　酵素実験①（反応時間・基質濃度）
第13回　酵素実験②（温度・pH 依存性）
第14回　DNA の抽出
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。授業中のテーマごとのレポート 40%、試験 60%によって評価する。欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

谷　政八他『生理・生化学実験(第四版)』（地人書館 2007）
資料等はプリントして配付する。検体によっては、各自が準備する場合もある。

運動生理学		担当教員	鳴瀬（なるせ）　みどり
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	選択

[1] 授業のねらい

運動生理学は「運動によってからだにどのような変化が生じるか、その現象としくみを研究する学問」である。それぞれの分割された観点から学習した上で、最終的には生体の中でこれら諸機能の変化が同時に関連しあいながら生じていることを理解し、運動を行ったときの体の変化について総合的に考察する能力の習得を目指す。

[2] 授業の計画

第 1回　運動生理学の概要
第 2回　運動と神経
第 3回　運動と感覚
第 4回　運動と筋肉
第 5回　運動と呼吸
第 6回　運動と循環
第 7回　運動と代謝
第 8回　運動と血液
第 9回　運動と内分泌
第10回　運動と体温調節
第11回　運動と栄養・代謝
第12回　運動と加齢
第13回　運動処方
第14回　運動療法
第15回　まとめ

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。
試験80%、テーマレポート20%、欠席、遅刻、早退及び授業を妨げる行為は減点する。

[4] 教　　材

春日規克・竹倉宏明編『改訂版 運動生理学の基礎と発展』(フリースペース 2006)

[5] 参考図書

勝田茂編著『入門運動生理学 第3版』(杏林書院 2007)
山本順一郎編『エキスパート 管理栄養士養成シリーズ 運動生理学』(化学同人 2005)
加藤秀夫・中坊幸弘編『NEXTスポーツ・運動栄養学』(講談社サイエンティフィック 2007)
鈴木正成著『改訂新版 実践的スポーツ栄養学』(文光堂 2006)

社会福祉		担当教員	大関賢治（おおせきけんじ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次後期	必修

[1] 授業のねらい

食物栄養学の専門職をめざす人は、「健康と社会生活の関係性」を理解することが必要です。そのためには、社会の仕組みを理解すること、病気や障害が私達の生活に様々な問題を引き起こすこと、また、誰もが一生のうちに何度かいろんな生活問題に遭遇することを学ぶことが必要です。

社会福祉は、こうした生活上の様々な問題を解決し、支援するための法律や制度・援助技術についての学問です。本講義では、以上のことを基本として、福祉問題の理解と実戦で役に立つ社会福祉の基礎知識を学ぶことを目標としています。

[2] 授業の計画

第 1回　社会福祉の理念（第１章）
第 2回　社会福祉の歴史（第２章）
第 3回　社会福祉の歴史（第２章）
第 4回　社会福祉の法と行財政（第３章）
第 5回　ソーシャルワークの理解（第４章）（利用者との信頼関係を作る）
第 6回　最低生活保障と生活保護制度（第５章）
第 7回　児童家庭福祉と次世代育成の展開（第６章）
第 8回　児童虐待（ビデオ）
第 9回　障害者の自立と福祉（第７章）
第 10回　応益負担について（資料）
第 11回　高齢者の生活と福祉（第８章）
第 12回　高齢者の生活と福祉（第８章）
第 13回　成年後見制度（契約能力のない人の支援）
第 14回　地域福祉への展開（第９章）
第 15回　ハンセン氏病を知り偏見や差別を無くそう

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行います。

レポート 45 点、試験 55 点として評価します。

欠席、遅刻、早退及び授業の妨げになる行為は減点します。

[4] 教　　材

（新）社会福祉とはなにか　　大久保秀子　　中央法規

[5] 参考図書

印刷物を配布します。

食料経済		担当教員	加藤辰夫（かとうたつお）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2単位	2年次通年	選択

[1] 授業のねらい

フードマーケティングという視点から、消費者と食品、そしてそれを媒介する企業・産業（＝フードビジネス）の関係を考える。食品関連産業全体としての生産額は100兆円に達するほど巨大で、それと共に食料が生命を維持するために不可欠なものであるという点に食料経済の重要性がある。この巨大で複雑多岐な産業を、食生活、食料需給、市場流通、市場価格、関連産業、政策の順に、経済的観点から明らかにする。

[2] 授業の計画

第 1回　食生活の動向(1)食品関連産業の総生産と付加価値
第 2回　食生活の動向(2)日本型食生活と食の多様化
第 3回　食料の生産・供給の構造　－供給の価格弾力性と特化係数－
第 4回　食料の流通構造(1)青果物卸売市場のしくみ
第 5回　食料の流通構造(2)米流通の変化と貿易
第 6回　食料の流通構造(3)水産物卸売市場の構造変化
第 7回　市場価格の形成と変動　－需要と供給、市場均衡価格－
第 8回　復習と小テスト
第 9回　食品加工業と「食の安全性」－製品の差別化と産地偽装－
第10回　食料の消費・需要の構造(1)価格弾力性と所得弾力性
第11回　食料の消費・需要の構造(2)食生活の変化と需要の変化
第12回　都市の食料消費　－食生活の変化と中食産業－
第13回　食品廃棄物と資源循環型社会　－リユース・リデユース・リサイクル－
第14回　食料政策と自給率　食料需給表より
第15回　復習と小テスト

[3] 評価の方法

試験期間中に試験は実施せず、授業中にレポート及び小テストを課す。レポート2回(30点)、小テスト2回（50点)、受講態度（20点）で評価する。欠席、遅刻、早退については減点する。

[4] 教　　材

小林哲郎編『新訂・食料経済』(中央法規 2003)

[5] 参考図書

日本フードスペシャリスト協会編『食品の消費と流通』(建帛社 2000)

[6] その他

電卓を持参すること。

フードコーディネート論		担当教員	岸　松　静　代（きし　まつ　しず　よ）
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
講義	2 単位	2 年次前期	選択

[1] 授業のねらい

食に対する消費者の要求は、安全、健康、おいしさ、価格など多様化してきている。そこで、特に料理を提供する場面で、料理を作るだけでなく快適な食事ができるように配慮できる人材が求められている。この授業では料理、メニュー、食卓、食空間、フードマネジメントを含めた食のコーディネートを行う力をつけることをねらいとする。

また昔から伝わる固有の食事文化を守り育てると共に、自然環境への負荷を少なくするための配慮のできる力も養いたい。

[2] 授業の計画

第　1 回　フードコーディネートとは　　食べることの意義　6W1H
第　2 回　食事文化の伝統（日本の食事文化）
第　3 回　食事文化の伝統（ハレの食とケの食）
第　4 回　食事文化の伝統（外国の食事文化）
第　5 回　メニュープランニングの理念
第　6 回　様式別のメニュー（日本、中国、フランス、イタリア料理様式）
第　7 回　テーブルウェア
第　8 回　テーブルセッティング（西洋･日本･中国料理とパーティ用）
第　9 回　食卓の演出（日本、外国の歳時記、スタイル別、テーマ別）
第 10 回　日本、中国、ヨーロッパの食事作法と現代の作法
第 11 回　食のサービス・マナーの基本
第 12 回　食空間のコーディネート
第 13 回　フードマネジメント
第 14 回　食環境とフードシステム
第 15 回　フードコーディネートと食育

[3] 評価の方法

試験期間中に試験を行う。また数回のレポートの提出を求める。
試験 70 点、レポート 30 点とする。
欠席、遅刻、早退、及び授業進行に妨げになる行為（私語、携帯電話など）は減点する。

[4] 教　　材

日本フードスペシャリスト協会編『新版フードコーディネート論 第 2 版』(建帛社 2006)

[5] 参考図書

日本フードコーディネーター協会編『フードコーディネーター教本』(柴田書店 1998)
加田静子・高木節子編『テーブルコーディネート』(愛智出版 1999)

演習Ⅰ		担当教員	三谷勝己（みたにかつみ）　他
授業の種類	単位数	配当学年・時期	必修・選択
演習	2 単位	2 年次通年	選択

[1] 授業のねらい

1 年次に学んだ食品、栄養、健康、衛生などに関する基礎知識の中で、特に興味をもった分野について、さらに深く追求していくことを目的とする食物科学の演習である。ここでは各々の専門分野において、授業の中では取り上げられなかった専門知識を解説すると共に、少しずつ解き明かされる最新の研究情報に文献講読を通して触れ理解を深めたい。また、実際の研究や学問はどうやってなされるのか、演習形式で体験学習して、本科目で得られた知識を卒業研究の中で応用できるようにする。

[2] 授業の計画（実験系）

第 1 回　実験科学の考え方
第 2 回　仮説設定のための発想法
第 3 回　発想の方法
第 4 回　文献調査の目的、方法
第 5 回　文献調査①（文献の流れ）
第 6 回　文献調査②（文献速報の利用）
第 7 回　文献調査③（学会誌の講読　栄養と食糧学会など）
第 8 回　文献調査④（学会誌の講読　日本農芸化学会など）
第 9 回　文献調査⑤（学会誌の講読　栄養改善学会など）
第 10 回　実験方法の組み立て①（試料採取法、処理など）
第 11 回　実験方法の組み立て②（分析法の選択など）
第 12 回　使用実験器具の説明（ガラス器具の取り扱い方など）
第 13 回　使用機器の説明
第 14 回　実験試薬の説明①（試薬の性質など）
第 15 回　実験試薬の説明②（秤量法、調製法など）
第 16 回　予備試験①（精度、操作）
第 17 回　予備試験②（不備の改良）
第 18 回　中間報告
第 19 回　実験結果のまとめ①（データ入力）
第 20 回　実験結果のまとめ②（集計）
第 21 回　実験結果のまとめ③（統計処理）
第 22 回　実験結果のまとめ④（結果評価）
第 23 回　実験結果のまとめ⑤（不足の追加）
第 24 回　論文作成①（緒言、方法）
第 25 回　論部作成②（結果、考察）
第 26 回　論文作成③（要旨作成）
第 27 回　プレゼンテーションの手法
第 28 回　図表の作成
第 29 回　発表方法①（説明の具体性）
第 30 回　発表方法②（質問の対処）

[2] **授業の計画（調査系）**

第 1 回　調査研究の考え方
第 2 回　仮説設定のための発想法
第 3 回　連想結合法の応用
第 4 回　文献調査①
第 5 回　文献調査②
第 6 回　文献調査③
第 7 回　文献調査④
第 8 回　文献調査⑤
第 9 回　アンケート調査法の解説①
第 10 回　アンケート調査法の解説②
第 11 回　調査の計画設定
第 12 回　調査書の作成①
第 13 回　調査書の作成②
第 14 回　予備調査①
第 15 回　予備調査②
第 16 回　集計方法の説明
第 17 回　集計の実践①
第 18 回　集計の実践②
第 19 回　調査結果のまとめ①（データ評価の仕方）
第 20 回　調査結果のまとめ②（集計表の作成）
第 21 回　調査結果のまとめ③（統計処理法）
第 22 回　調査結果の評価①
第 23 回　調査結果の評価②
第 24 回　論文作成①（緒言、方法）
第 25 回　論文作成②（結果）
第 26 回　論文作成③（考察）
第 27 回　論文作成④（要旨）
第 28 回　プレゼンテーションの手法
第 29 回　発表方法①（説明の具体性）
第 30 回　発表方法②（質問の対処）

[3] **評価の方法**

授業に参加し、体験学習することが重要であるので出席することを重視する。
各々の段階で課題を課すので、その提出物やレポートによって評価する。

[4] **教　　材**

授業の内容に応じてその都度指示する。

[5] **参考図書**

授業の内容に応じてその都度指示する。

[6] **その他**

①本科目の中で学習することは卒業研究の中で応用できるものなので、卒業研究と演習Ｉを履修する学生は同じ担当者に登録すること。
②演習Ｉの内容は卒業研究の進行により授業内容が前後することがある。